

平成30年度全国学力・学習状況調査

貝塚市の結果

貝塚市教育委員会

目 次

I. 調査の概要	P. 1
II. 結果の概要について	P. 1
(1) 領域・問題別の正答の状況と課題について（小学校）	P. 2
・小学校 国語A・B、算数A・B 理科	
(2) 領域・問題別の正答の状況と課題について（中学校）	P. 5
・中学校 国語A・B、数学A・B 理科	
III. 基本的な生活習慣等について（児童生徒質問紙調査より）	P. 8
・授業に関すること	
・家庭学習に関すること	
・規範意識、自己有用感等に関すること	
V. 今後に向けて	P. 22

平成30年度 全国学力・学習状況調査 貝塚市の結果

4月17日に文部科学省により全国の小学校6年生、中学校3年生を対象に「平成30年度全国学力・学習状況調査」が実施されました。

貝塚市教育委員会は、この分析結果を保護者や地域の方々と共有し、今後の本市の教育施策や学校の取組みに活かすことにより、本市の教育を一層充実させて参ります。

なお、この学力調査により、測定できる学力は特定の一部であり、学校における教育活動の一側面を表すものです。

I 調査の概要について

(1) 調査の目的

○義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析した上で、本市の教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

○学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

○以上のような取組みを通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 対象学年 小学校及び支援学校小学部第6学年、中学校及び支援学校中学部第3学年

(3) 調査内容

①教科に関する調査（国語・算数・数学・理科）

・主として「知識」に関する問題（国語A、算数A、数学A）

・主として「活用」に関する問題（国語B、算数B、数学B）

・主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題（理科）

②質問紙調査（児童生徒に対する調査、学校に対する調査）

II 結果の概要について

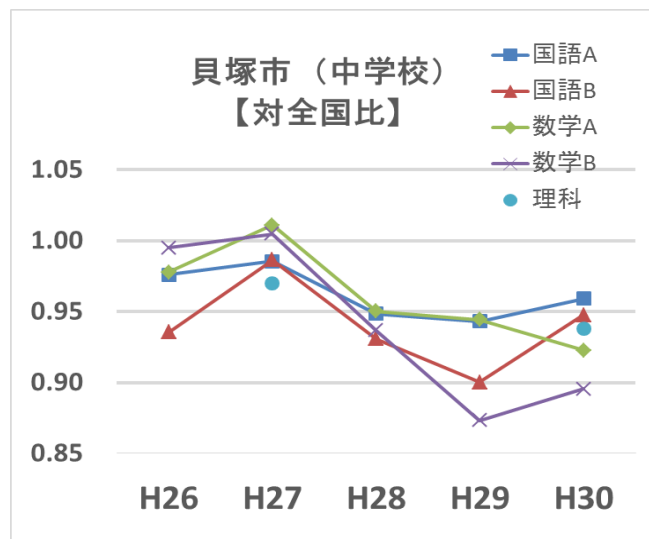
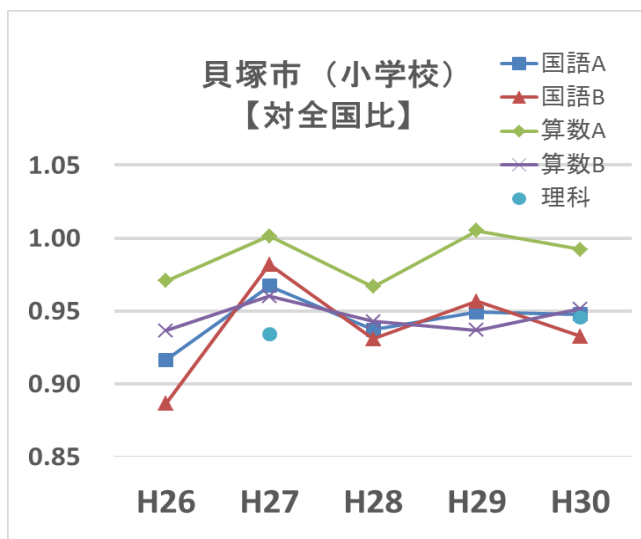
	区分	貝塚市	大阪府	全国
国語	A	67	68	70.7
	B	51	52	54.7
算数	A	63	63	63.5
	B	49	51	51.5
理科		57	57	60.3

	区分	貝塚市	大阪府	全国
国語	A	73	75	76.1
	B	58	59	61.2
数学	A	61	65	66.1
	B	42	46	46.9
理科		62	64	66.1

※「貝塚市」、「大阪府」、「全国」としているのは、貝塚市内公立学校・大阪府内公立学校・全国の公立学校の平均正答率(%)を表しています。

教科・区分別正答率比較/対全国比経年比較

貝塚市の平均正答率を全国の平均正答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。



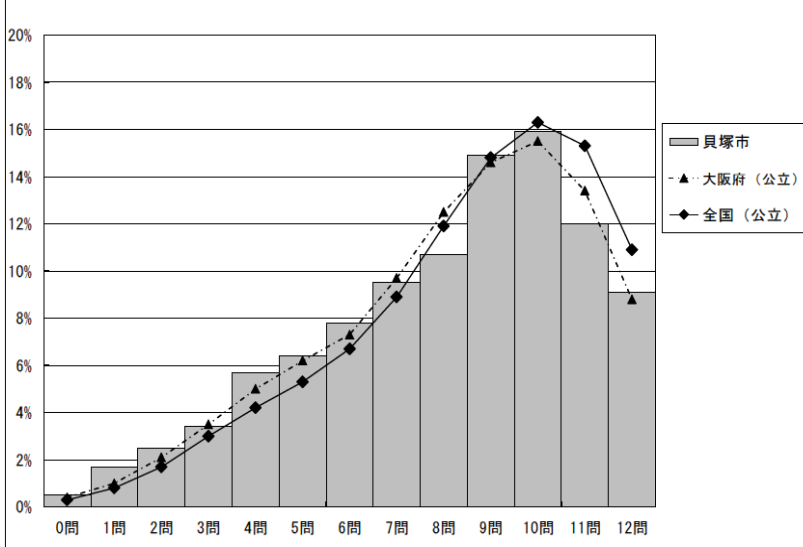
算数Aにおいては、全国平均とほぼ同じ結果を出している。また、前年度と比較すると、算数Bと理科に伸びが見られる。一方で、国語Aは、横ばいであるが、国語Bについては、少しの下降が見られる。

前年度と比較すると、国語の伸びが見られる。特に、国語Bについては、5%の上昇があった。また、数学は、数学Aで下降したものの、数学Bは、少し改善の傾向がみられた。理科については、少し下降している。

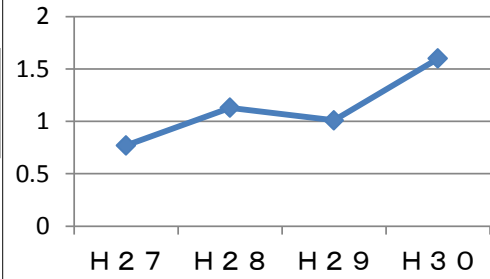
(1) 領域・問題別の正答の状況と課題について (小学校)

国語A

正答数分布グラフ (横軸: 正答数, 縦軸: 割合)



国語Aの無解答率の推移



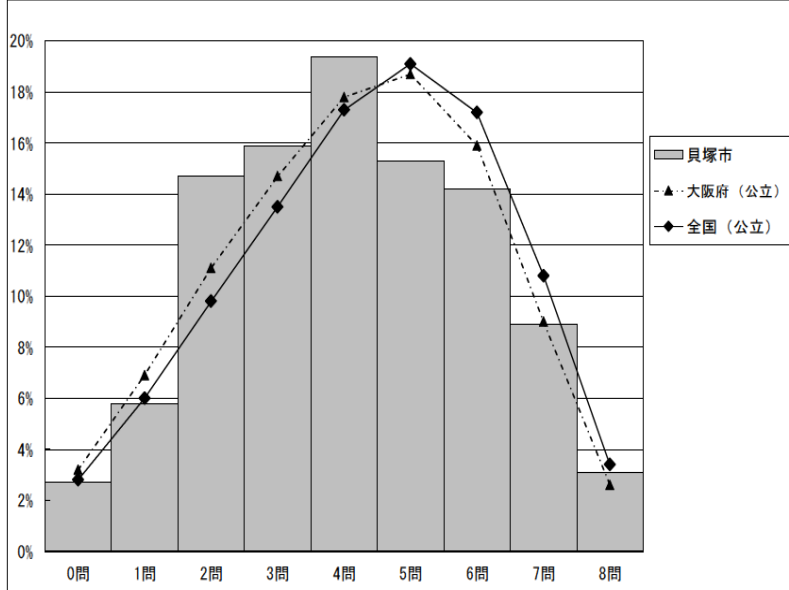
貝塚市の無解答率を全国の無解答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。

○国語Aでは、大阪府平均正答率(以降、府平均と記します)を1ポイント、全国平均正答率(以降、国平均と記します)を3.7ポイント下回りました。今回出題された中では、特に、文の中における主語と述語との関係を適切に捉え、文を正しく書き直す問いに課題が見られました。また、文の中にある漢字を正しく使えるかどうかをみる問題では、用いられている言葉や文脈との関係から、適切に選択できなかった児童が多く、漢字への課題が見られました。

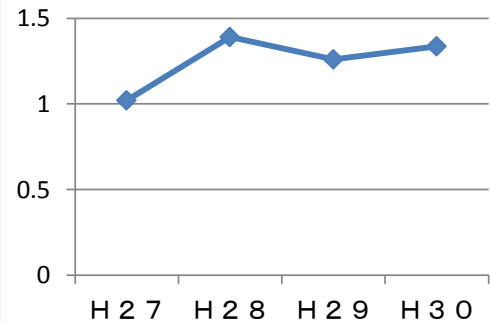
○無解答率は、昨年度より高くなり、経年比較では、最も高くなりました。

国語B

正答数分布グラフ (横軸: 正答数, 縦軸: 割合)



国語Bの無解答率の推移



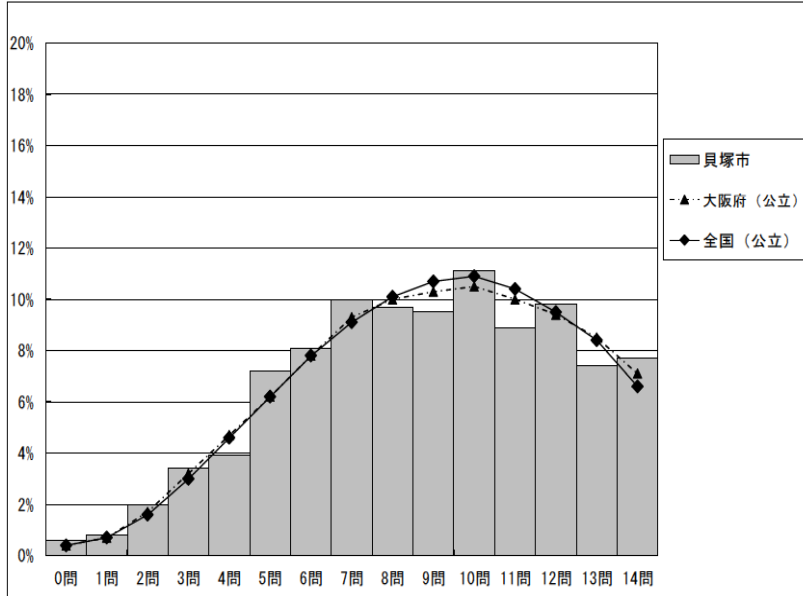
貝塚市の無解答率を全国の無解答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。

○国語Bでは、府平均を1ポイント、国平均を3.7ポイント下回りました。特に、目的や意図に応じて、内容の中心を明確にして、詳しく書く設問や自分の意見と比べるなどして考えをまとめて書く設問に大きな課題が見られました。

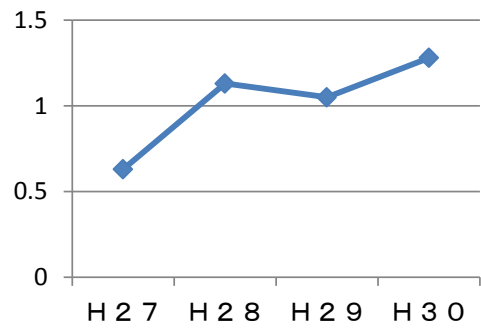
○無解答率は、昨年度より少し高くなりました。無解答率が高かった問題は、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしなが、複数の条件に合わせて記述する問題でした。

算数A

正答数分布グラフ（横軸：正答数、縦軸：割合）



算数Aの無解答率の推移



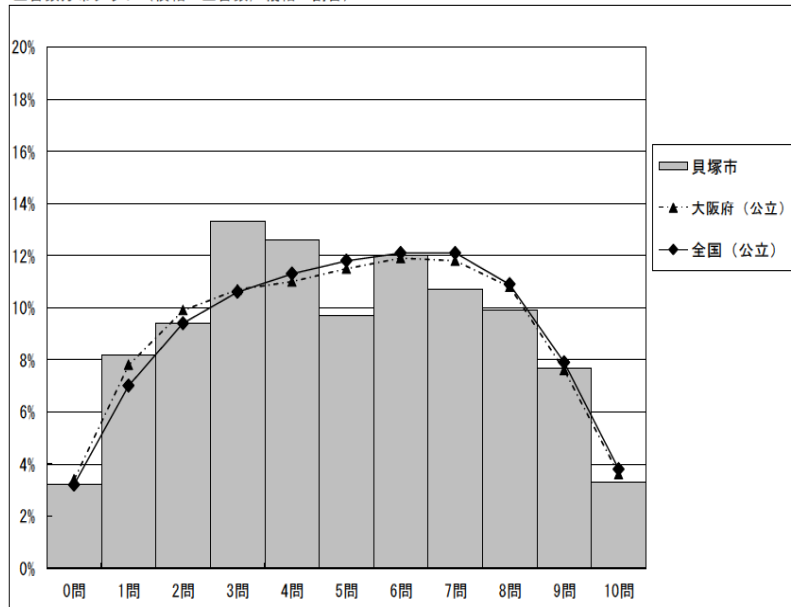
貝塚市の無解答率を全国の無解答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。

○算数Aでは、府平均と同じでしたが、国平均を0.5ポイント下回りました。円周率の意味についての理解や、折れ線グラフから変化の特徴を読み取る設問に課題が見られました。一方で、 180° の角の大きさの理解や、面積がそろっているときの込み具合の比べ方については理解が高く、約9割の正答率でした。

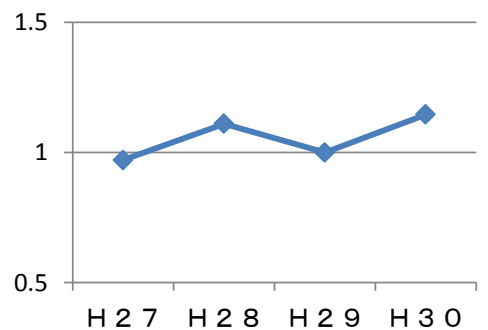
○無解答率は、昨年度よりも高くなり、経年比較では最も高くなりました。

算数B

正答数分布グラフ（横軸：正答数、縦軸：割合）



算数Bの無解答率の推移



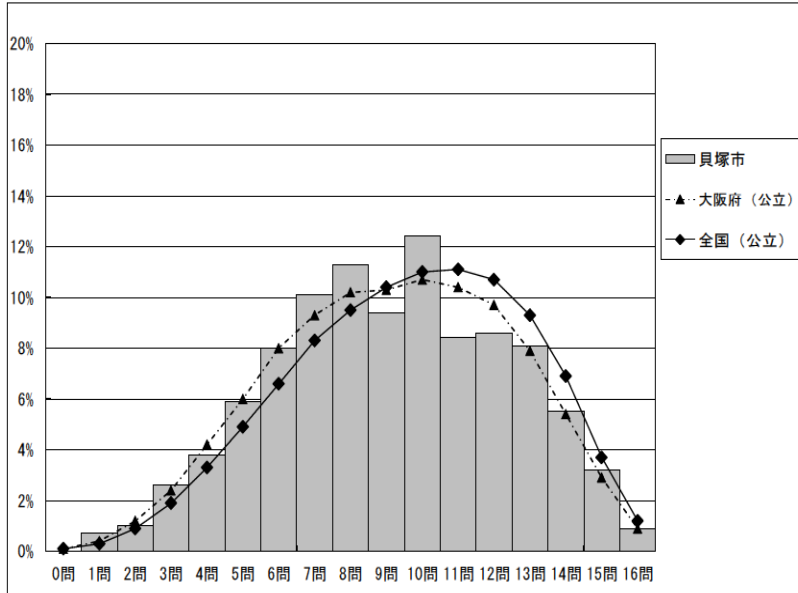
貝塚市の無解答率を全国の無解答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。

○算数Bでは、府平均を2ポイント、国平均を2.5ポイント下回りました。出題された設問では、全体的に記述式問題に課題が見受けられます。特に、示された情報や観点をグラフと関連づけて解釈し、それについて言葉や数を用いて記述したり、複数のグラフから読み取ることができることを正しく判断したりする設問については、大きく課題が見られます。

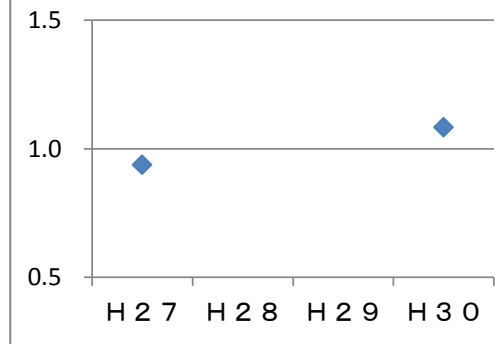
○無解答率は、昨年度より上昇しています。

理科

正答数分布グラフ（横軸：正答数、縦軸：割合）



理科の無解答率の推移



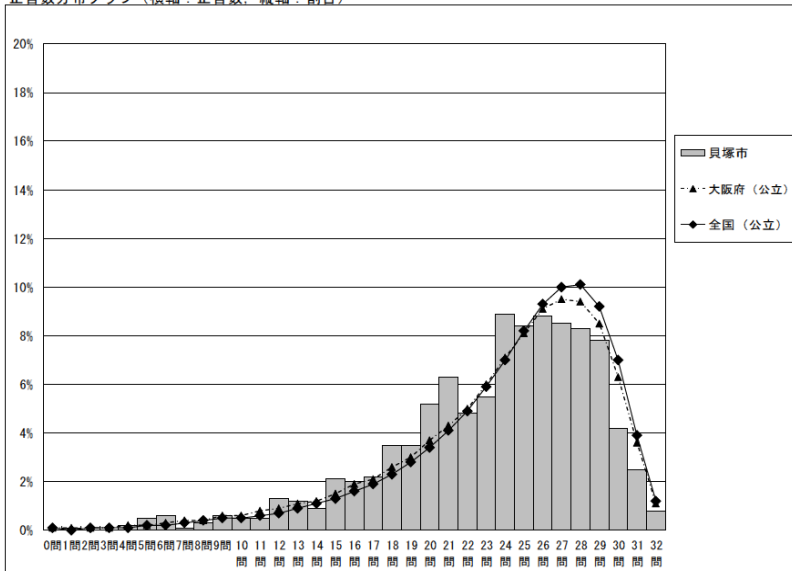
貝塚市の無解答率を全国の無解答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。

- 理科では、府平均と同じでしたが、国平均を3.3ポイント下回りました。特に、実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述することや、問題に正対したまとめを記述することに課題が見られました。また、「関節」や「たい積」など、科学的な言葉や概念の理解についても課題が見られました。
- 無解答率は、前回より上昇しています。

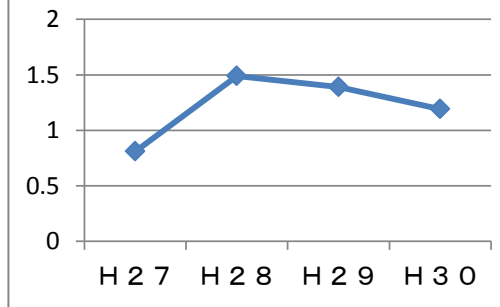
(2) 領域・問題別の正答の状況と課題について (中学校)

国語A

正答数分布グラフ (横軸: 正答数, 縦軸: 割合)



国語Aの無解答率の推移

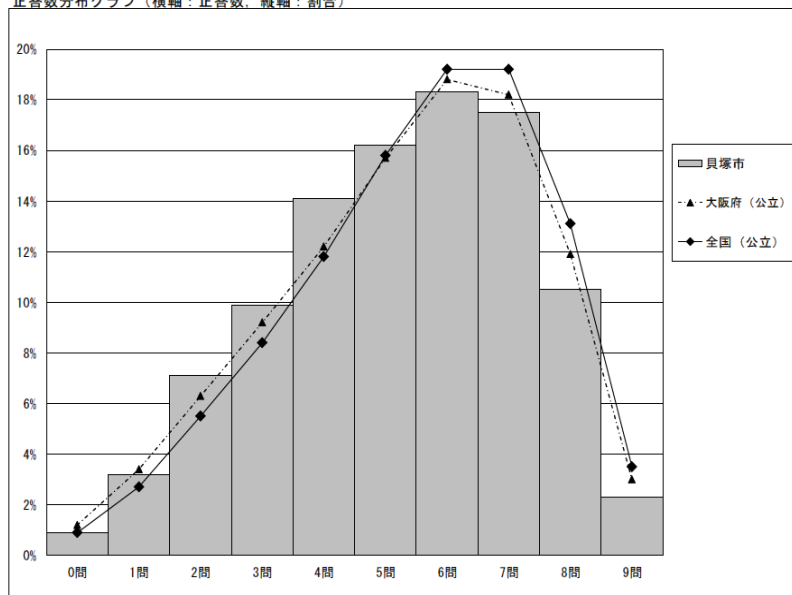


貝塚市の無解答率を全国の無解答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。

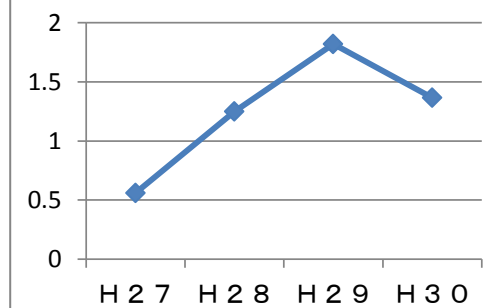
- 国語Aでは、府平均を2ポイント、国平均を3.1ポイント下回りました。文脈に即して漢字を正しく読むことはよくできていますが、漢字を正しく書くことには課題が見られます。また、語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うことに課題が見受けられます。
- 無解答率は、2年連続で改善の傾向が見られます。

国語B

正答数分布グラフ (横軸: 正答数, 縦軸: 割合)



国語Bの無解答率の推移

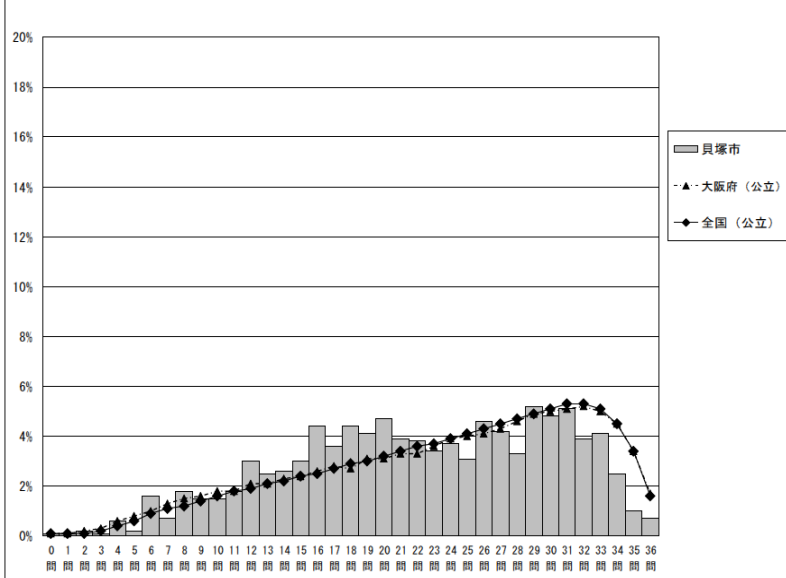


貝塚市の無解答率を全国の無解答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。

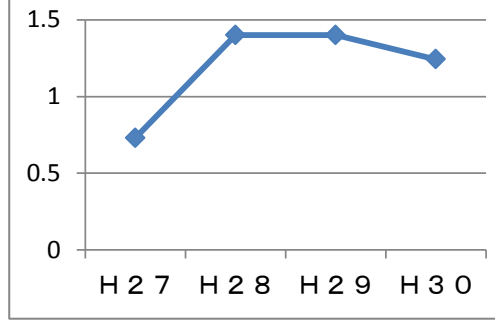
- 国語Bでは、府平均を1ポイント、国平均を3.2ポイント下回りました。質問の意図をとらえたり、話の展開に注意して、必要に応じて質問したりすることはよくできていますが、目的に応じて文章を読み、内容を整理して書くことに大きな課題が見られます。
- 無解答率は、昨年度よりも下がり、改善の傾向が見られます。

数学A

正答数分布グラフ（横軸：正答数、縦軸：割合）



数学Aの無解答率の推移

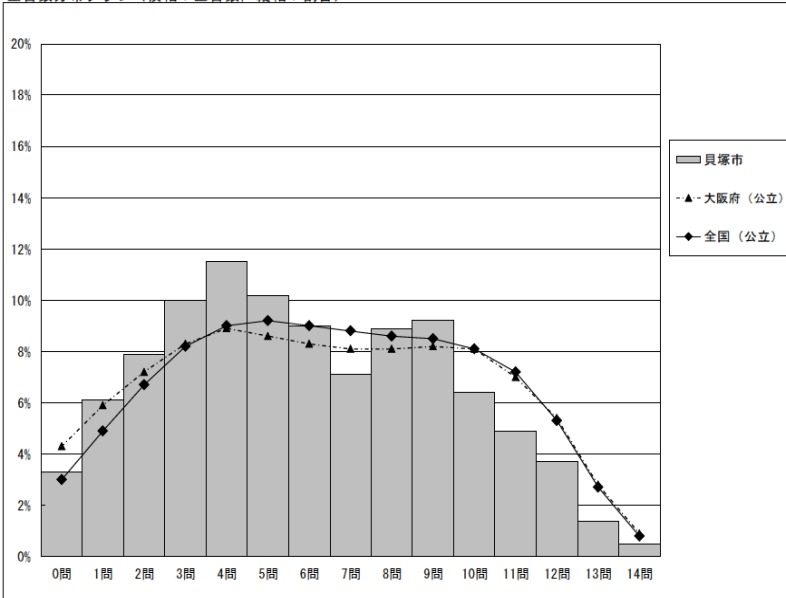


貝塚市の無解答率を全国の無解答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。

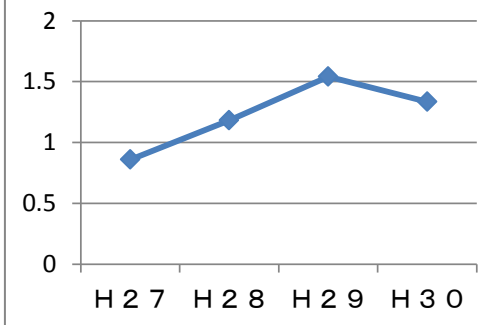
- 数学Aでは、府平均を4ポイント、国平均を5.1ポイント下回りました。数量の大小関係を不等式に表す設問や、確率に関する設問で大きな課題が見受けられました。また、「絶対値」や「一次関数」の意味を理解していないと解答できない問題に課題が見られました。
- 無解答率は、昨年度と比べて、少し改善の傾向が見られます。

数学B

正答数分布グラフ（横軸：正答数、縦軸：割合）



数学Bの無解答率の推移

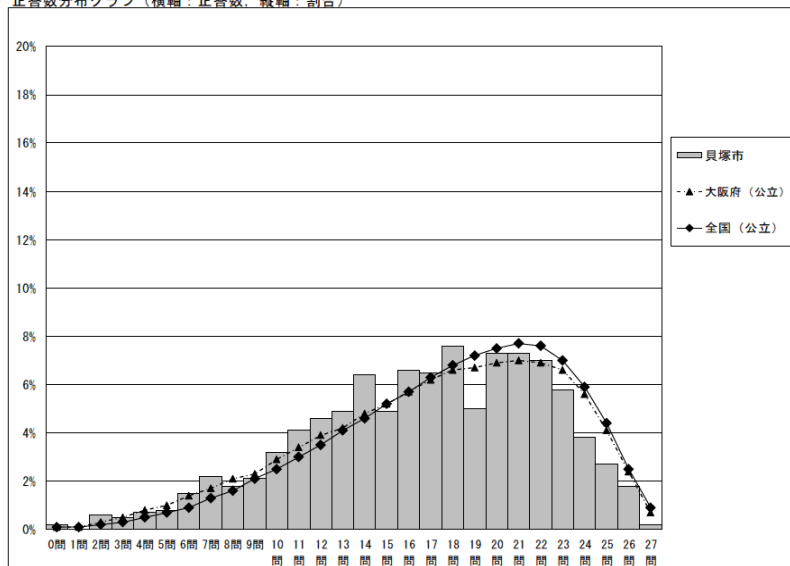


貝塚市の無解答率を全国の無解答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。

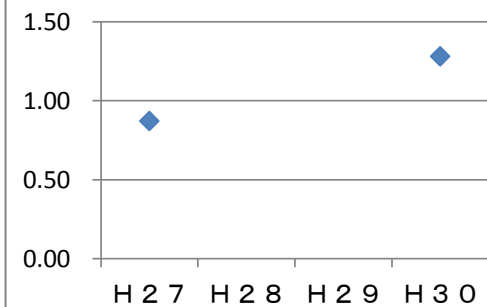
- 数学Bでは、府平均を4ポイント、国平均を4.9ポイント下回りました。式などから得られた数学的な結果を正しく解釈し、数学的な表現を用いてその根拠を説明することに大きな課題が見られます。
- 無解答率は、昨年度と比べて、少し改善の傾向が見られます。しかし、30～40%の無解答率である設問が数問あり、依然として記述式問題に課題が見受けられます。

理科

正答数分布グラフ（横軸：正答数、縦軸：割合）



理科の無解答率の推移



貝塚市の無解答率を全国の無解答率で割った値を経年比較で示しました。全国が「1」です。

○理科では、府平均を2ポイント、国平均を4.1ポイント下回りました。自然の事象・現象の原因として考えられる要因を見いだしたり、「変える条件」に伴って変化する「変わってしまう条件」を指摘したりすることに大きな課題が見られました。

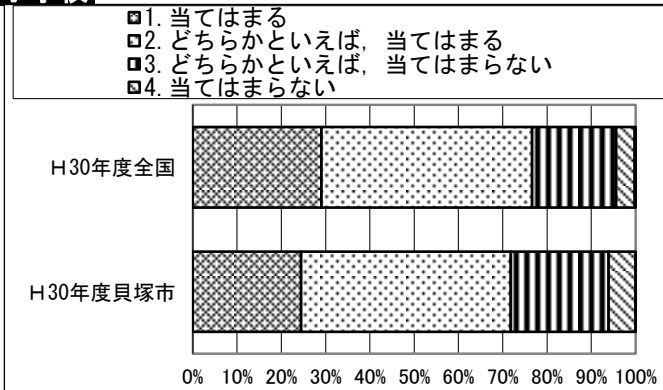
○無解答率は、前回より上昇しています。また、20%以上の無解答率である設問が数問あり、記述式問題に課題が見受けられます。

児童生徒質問紙調査の経年比較と今年度の児童生徒と学力の相関関係について分析しました。

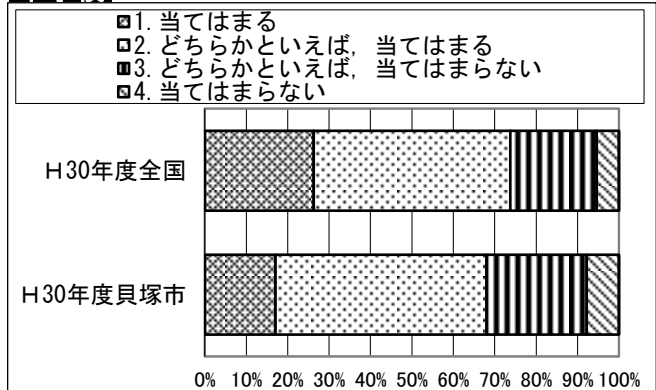
※ 以下の全ての項目について、（ ）の中は、中学生についてのものです。

1ー(1) 5年生まで（1、2年生のとき）に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。

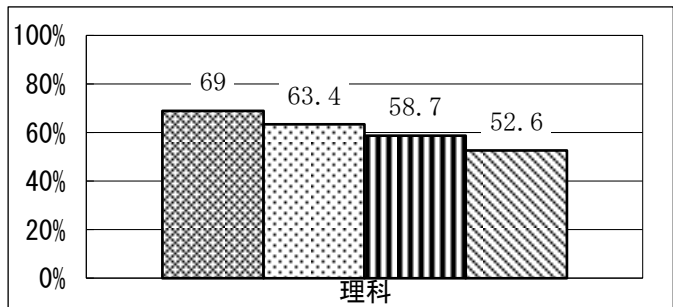
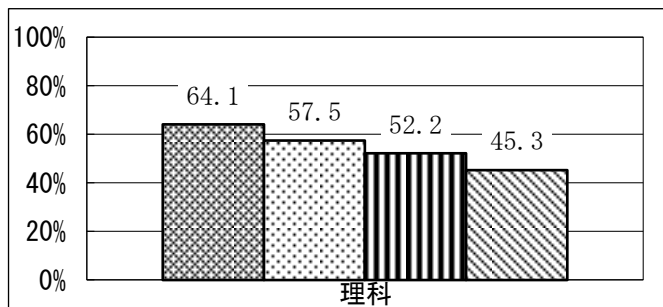
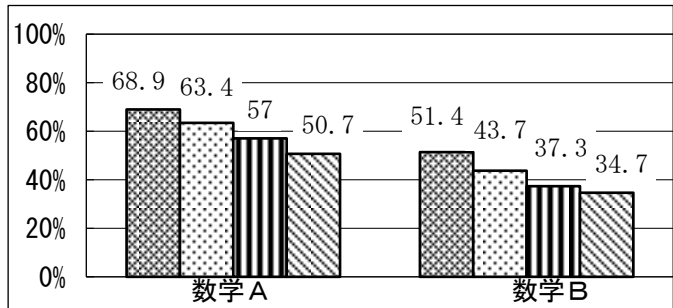
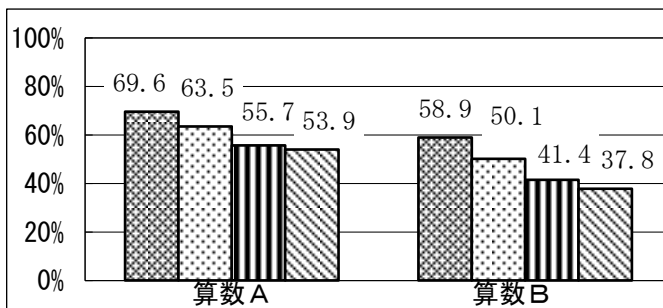
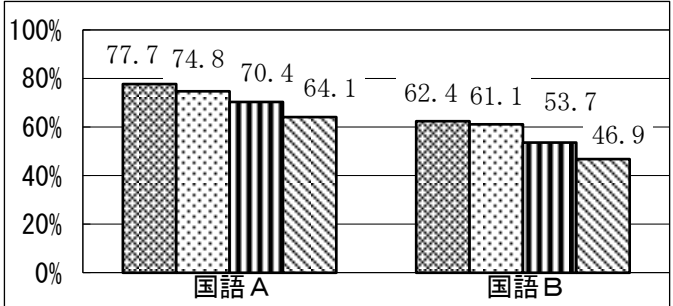
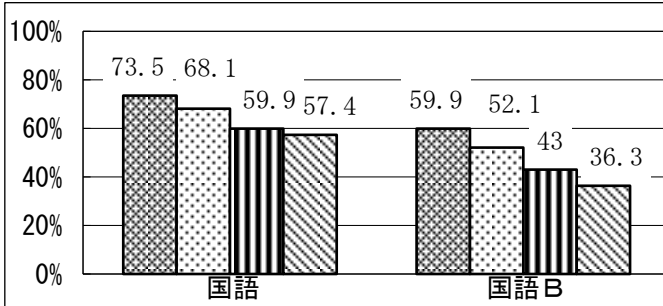
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



1ー(1)の質問項目のグラフは、「これまでに受けた授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか」という問いに回答した児童生徒の割合を比較したものです。

全国比でみると、小学校では、肯定的な回答が約72%で全国より約5ポイント下回り、中学校では、肯定的な回答が68%で、全国より約6ポイント下回っています。

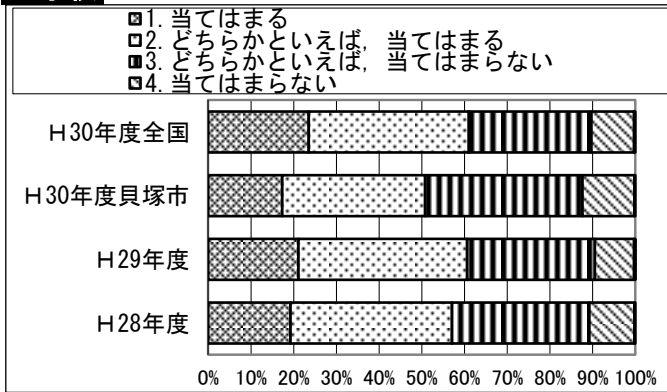
また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校ともに、全ての教科で差が大きく、非常に強い相関関係があることがわかります。

特に、小学校の国語B問題や算数B問題では、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より20%以上高くなっており、中学校の数学A問題でも同様に18%以上高くなっています。

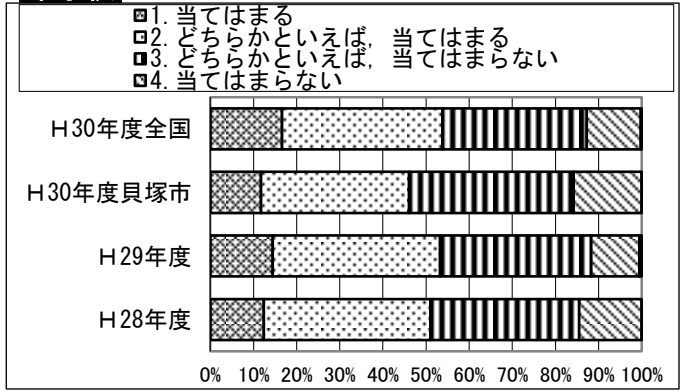
子どもたちが学ぶことに興味や関心をもち、見通しを持って学習に取り組めるため、導入場面の工夫や、自らの学びを実感できる振り返り場面の保障を行っていきたいと考えています。

1-(2) 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思いますか。

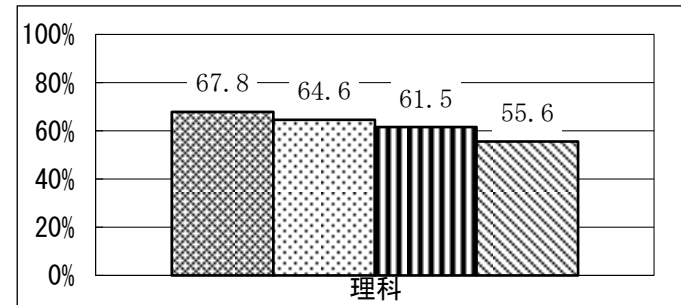
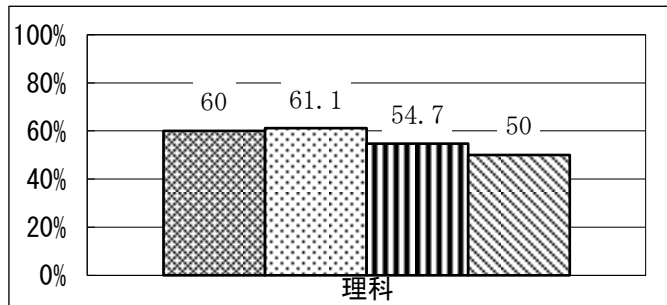
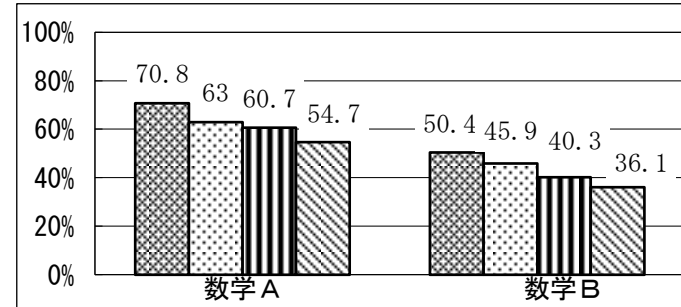
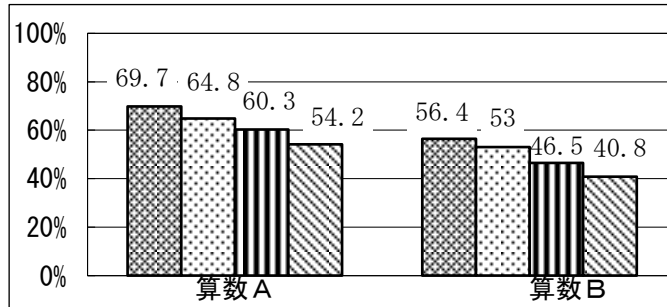
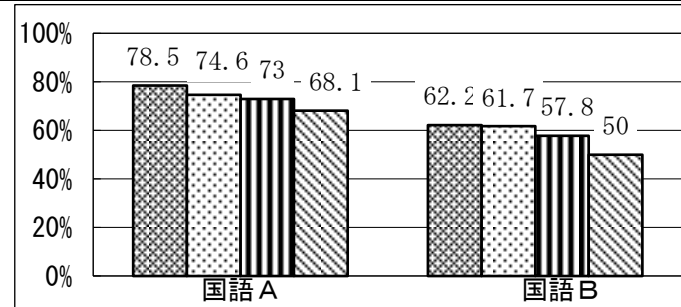
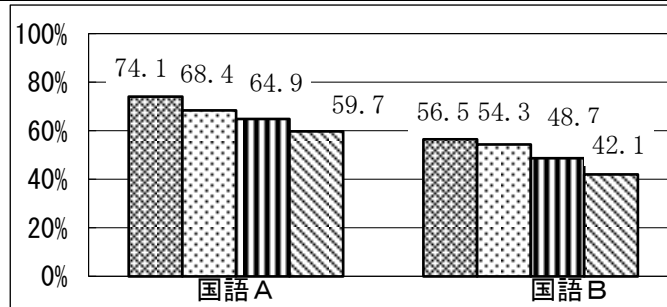
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



1-(2)の質問項目のグラフは、「5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思いますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

全国比でみると、小学校では、肯定的な回答が約51%で全国より約10ポイント下回り、中学校では、肯定的な回答が約46%で、全国より約8ポイント下回っています。

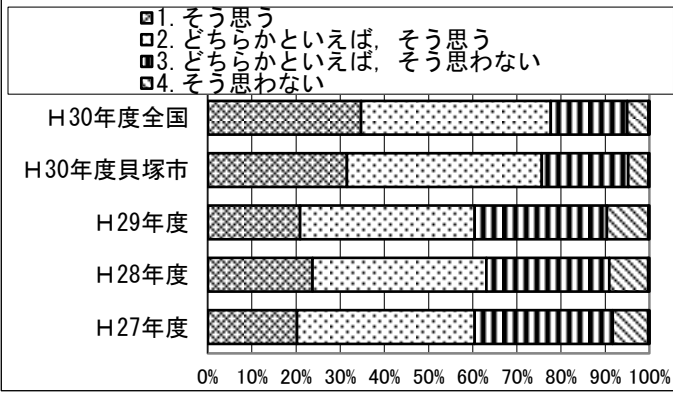
また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校ともに、全ての教科で差が大きく、強い相関関係があることがわかります。

特に、小学校の算数A問題や算数B問題では、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より15%以上高くなっており、中学校の数学A問題でも同様に16%以上高くなっています。

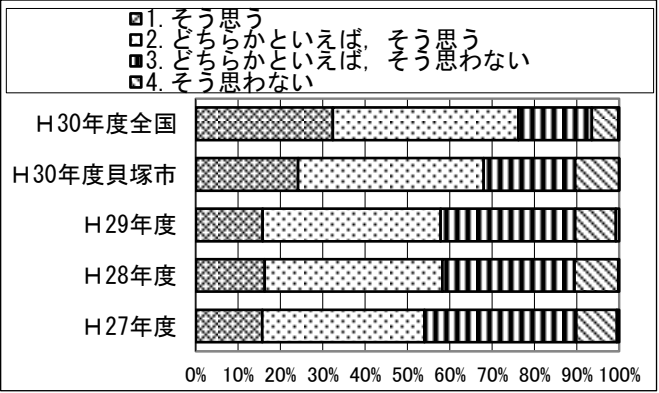
経年比較からみると、小中学校ともに昨年度より肯定的回答が低くなっていることから、これまで以上に、授業の中で自分の考えをしっかりとつための時間を確保し、発表の機会を設定するだけでなく、相手にわかりやすく伝えるための具体的方法を身に付けさせる授業へ転換することが大切だと考えています。

1-(3) 学級の友だちと(生徒)の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか

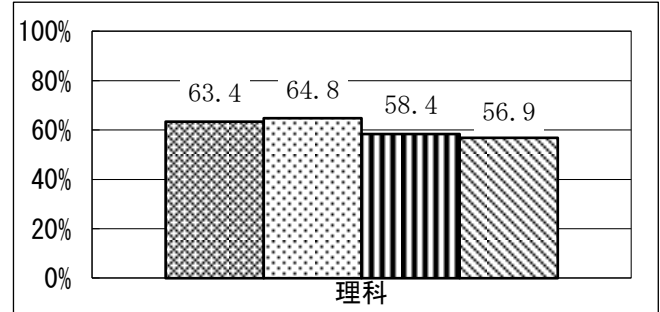
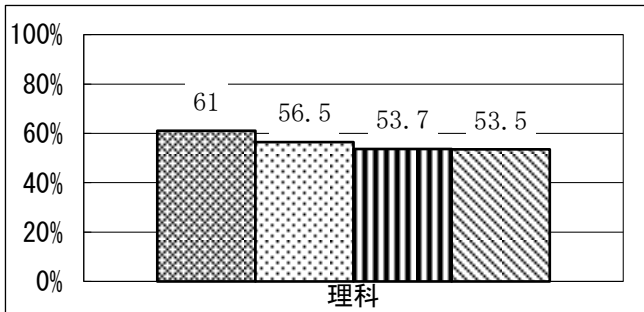
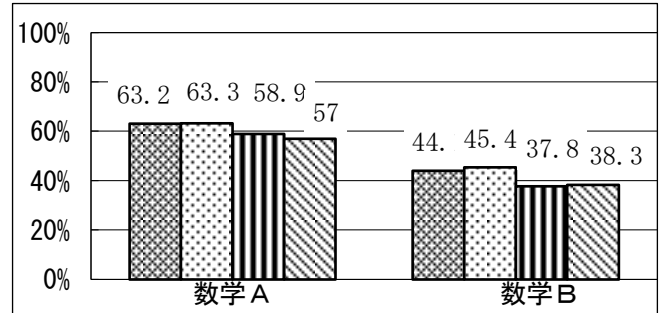
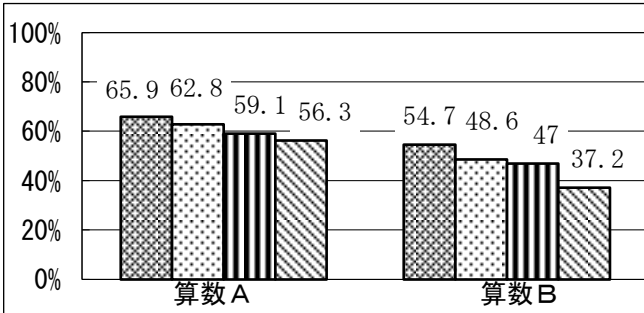
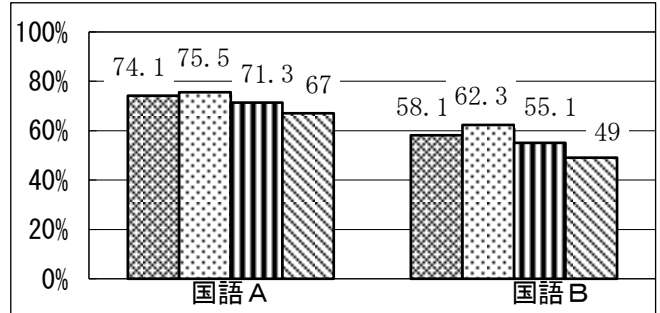
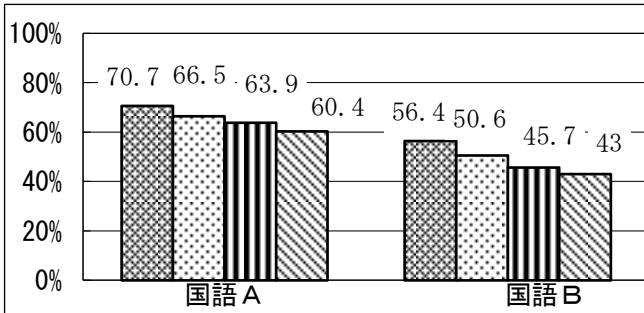
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



1-(3)の質問項目のグラフは、「学級の友だちと(生徒)の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

全国比でみると、小学校では、ほぼ全国並みの結果、中学校では、肯定的な回答が68%で、全国より、約8ポイント下回っています。

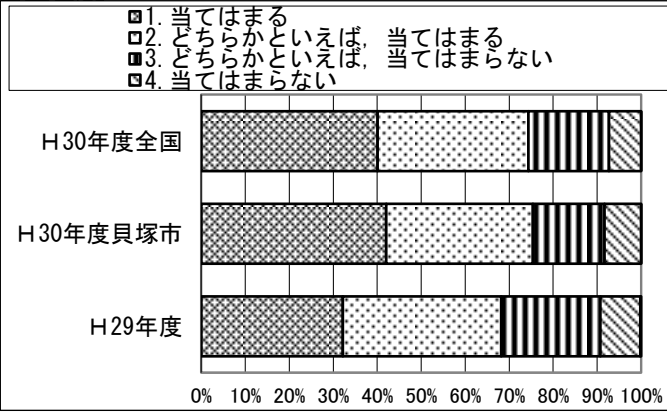
また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校ともに、全ての教科で差が大きく、強い相関関係があることがわかります。

特に小学校の算数B問題では、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より17%以上高くなっており、国語Bについても、13%以上高くなっていることから、他者との対話が、「思考力・判断力・表現力」に代表される応用力に大きく影響を及ぼすことが読み取れます。

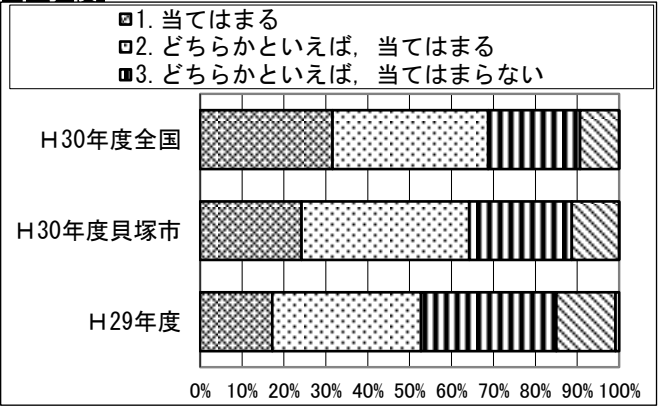
経年比較からみると、小学校は、昨年度より肯定的回答が15%以上向上し、中学校でも10%以上向上しています。学校では、子どもたちの自発的な疑問から答えを導き出すための「ペア学習」「班学習」による対話を用いた指導方法を取り入れています。このように、個人の学び中心の授業から、他との話し合いや意見の練り上げを取り入れたクラス全体の学びへと、授業が改善していることが結果として表れていると思われます。

1-(4) 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業や課外活動で地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会があったと思いますか。

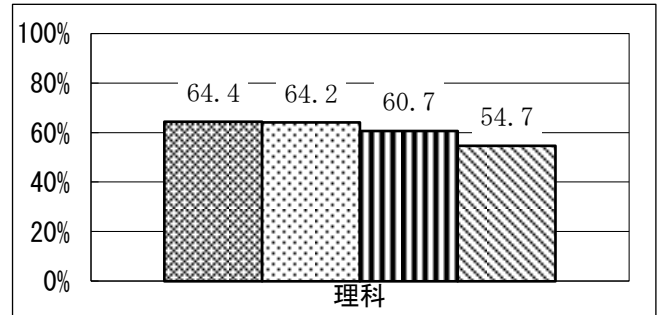
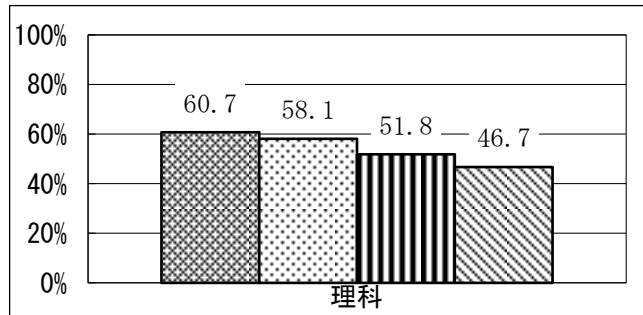
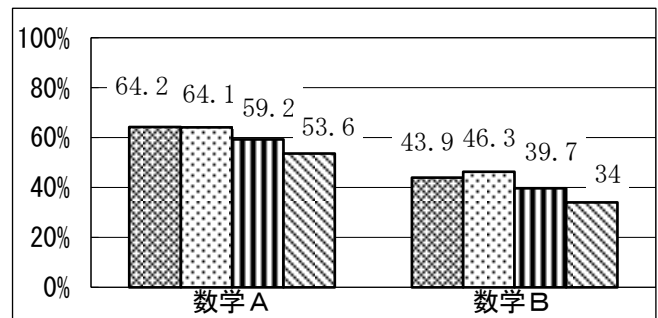
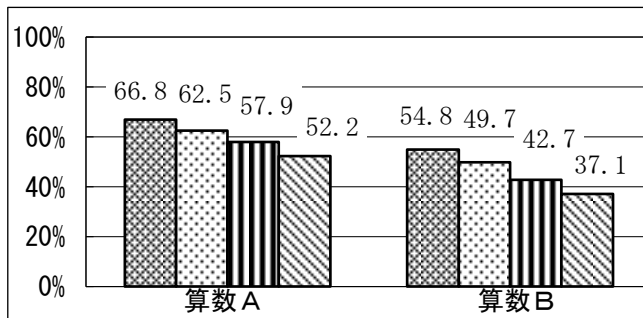
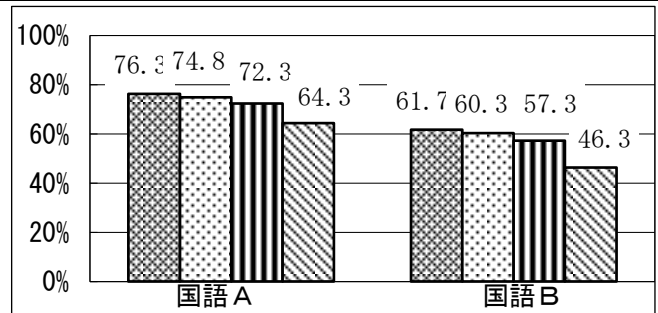
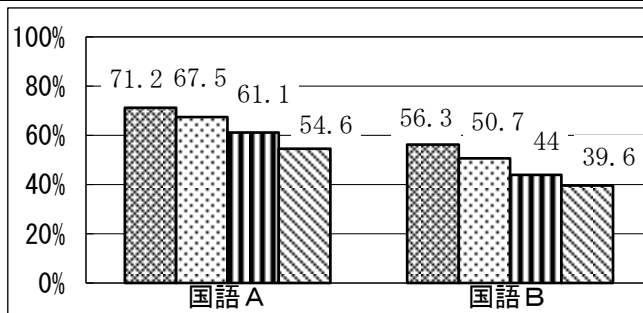
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



1-(4)の質問項目のグラフは、「5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業や課外活動で地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会があったと思いますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

全国比でみると、小学校では、全国を上回っていますが、中学校では、肯定的な回答が約64%で、全国より、約5ポイント下回っています。

また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校ともに、全ての教科で差が大きく、強い相関関係があることがわかります。

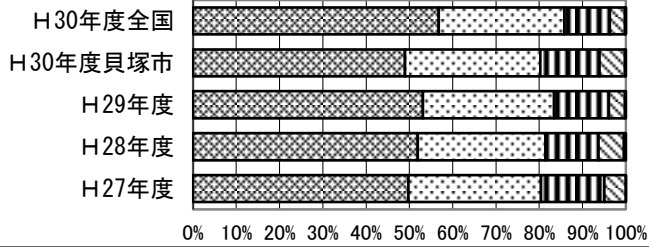
特に小学校の算数B問題では、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より17%以上高くなっており、国語A・B問題についても、16%以上高くなっています。また、中学校でも国語B問題では、15%以上高くなっており、地域の方々との交流や学習範囲を広げた教育の重要性が結果として表れています。

経年比較からみると、小中学校ともに、昨年度より肯定的回答が10%程度もしくはそれ以上向上しており、学校教育に対する地域の皆様のご理解とご協力の結果であると受け止めております。今後も、学校教育を地域や社会と共有、連携しながら、子どもたちがつけるべき力を育てていきたいと思っております。

1-(5) 算数(数学)の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いていますか

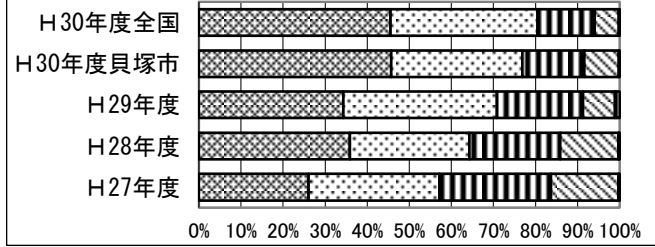
小学校

- 1. 当てはまる
- 2. どちらかといえば、当てはまる
- 3. どちらかといえば、当てはまらない
- 4. 当てはまらない

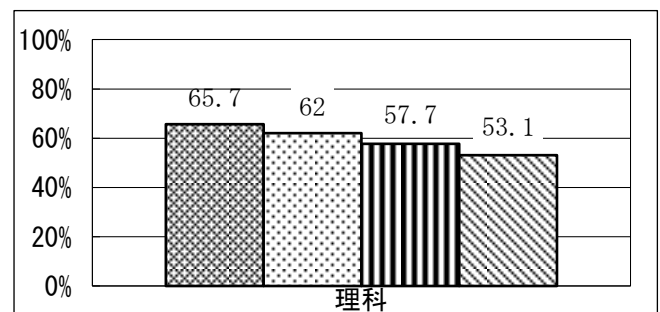
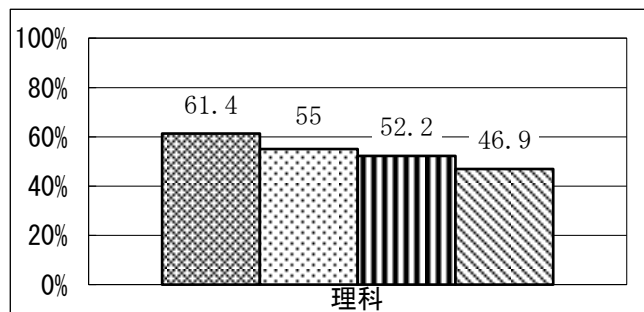
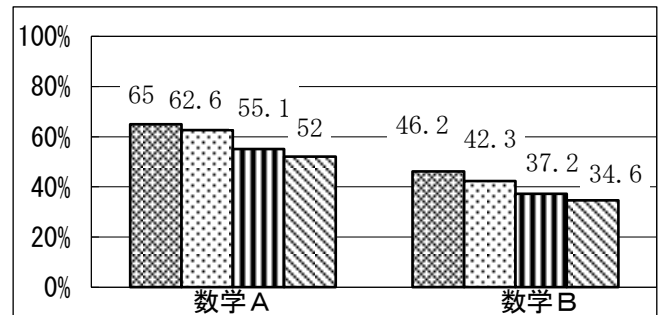
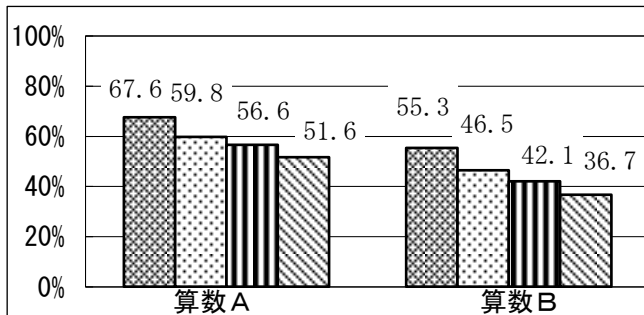
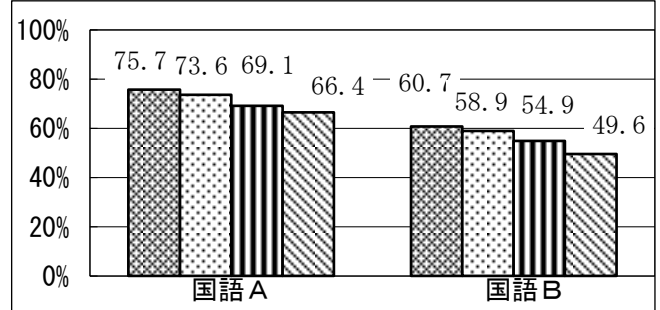
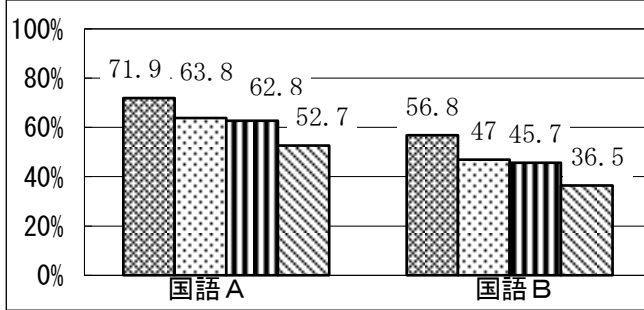


中学校

- 1. 当てはまる
- 2. どちらかといえば、当てはまる
- 3. どちらかといえば、当てはまらない
- 4. 当てはまらない



回答した選択肢別の平均正答率



1-(5)の質問項目のグラフは、「算数(数学)の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いていますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

小学校・中学校ともに80%程度の児童・生徒が、肯定的に回答していることがわかります。

また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校ともに、全ての教科で差が大きく、非常に強い相関関係があることがわかります。

特に、小学校の国語A・B問題では、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より20%程度高くなっており、算数B問題についても、18%以上高くなっています。

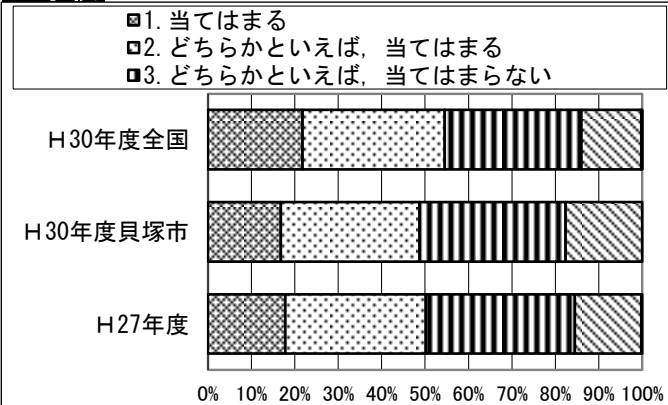
また、中学校でも、国語や数学のB問題では11%以上、理科では12%以上高くなっています。

経年比較をみると、中学校では、年々肯定的回答が上昇しており、小学校からの積み上げに加え、中学校での授業改善がなされていることが伺えます。

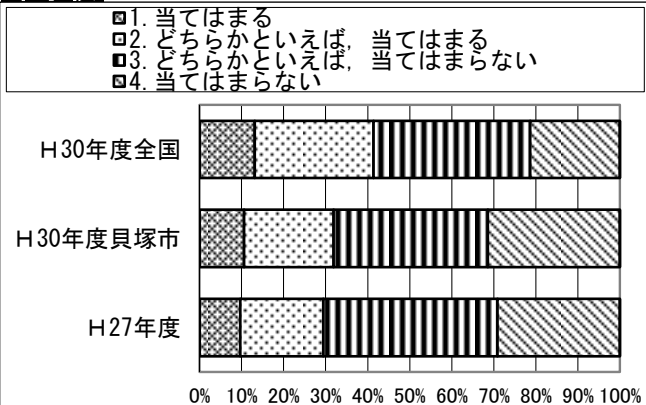
単に「黒板を写す」受動的なノートから、「自分なりの考えや思考過程をまとめる」「友だちの意見などから得られた情報をもとに、解決へのポイントをまとめる」など、書き方や内容を工夫し、「今後の学習に生かす」能動的なノート作りができるよう、ノート指導にも力をいれていきたいと考えています。

1-(6) 理科の授業で、自分の考えをまわりの人に説明したり発表したりしていますか

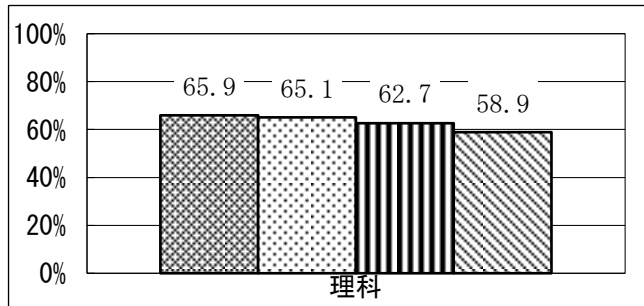
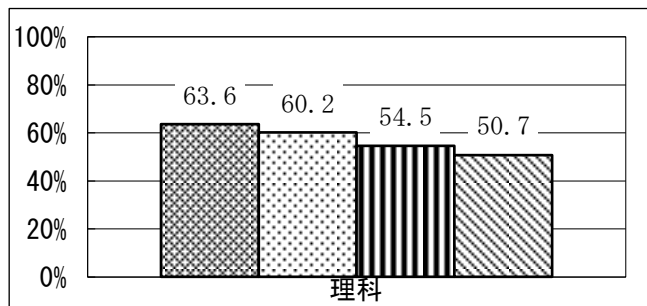
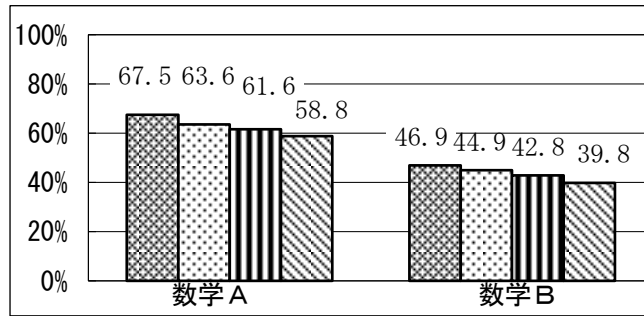
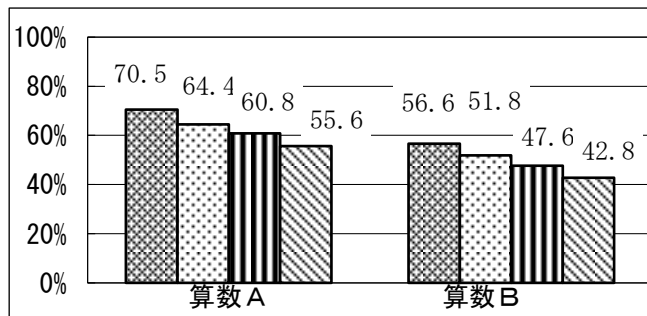
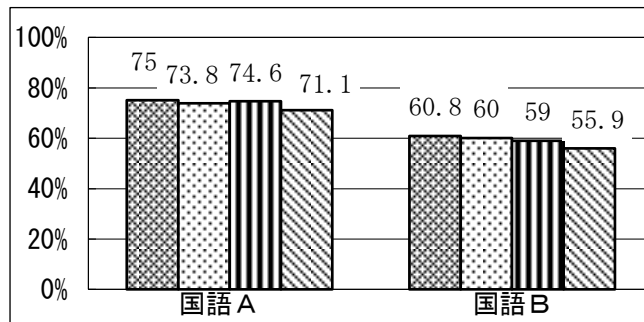
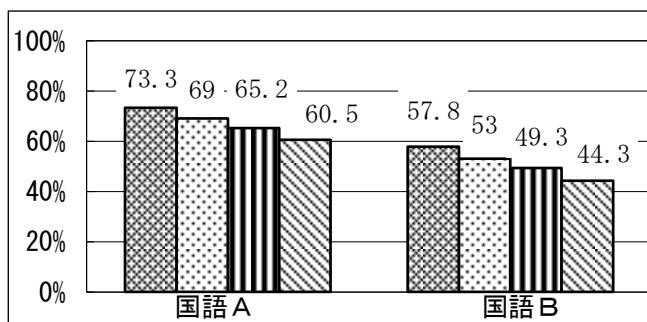
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



1-(6)の質問項目のグラフは、「理科の授業で、自分の考えをまわりの人に説明したり発表したりしていますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

別の質問項目にある「理科の授業で、観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えていますか(観察や実験の結果をもとに考察していますか)」では、小学校では、約79%の肯定的回答に対して、本回答は、約49%、中学校では、約58%の肯定的回答に対して、本回答は約32%となっており、考えたことをアウトプットする機会が少ないのではないかと課題が見られました。

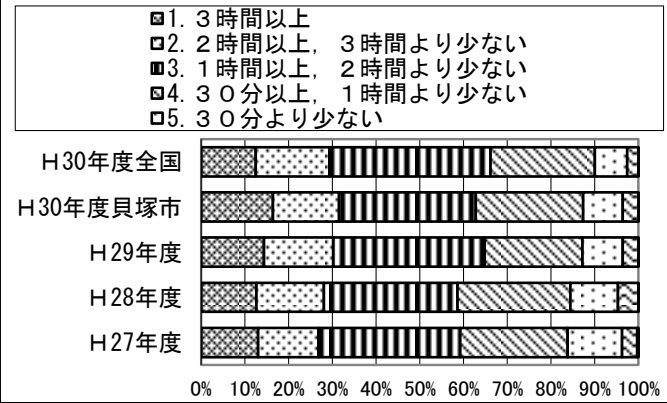
全国比でも、小学校では、肯定的な回答が約49%で、全国より約6ポイント、中学校では、肯定的な回答が約32%で、全国より、約10ポイント下回っています。

また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校ともに、全ての教科で差が大きく、強い相関関係があることがわかります。

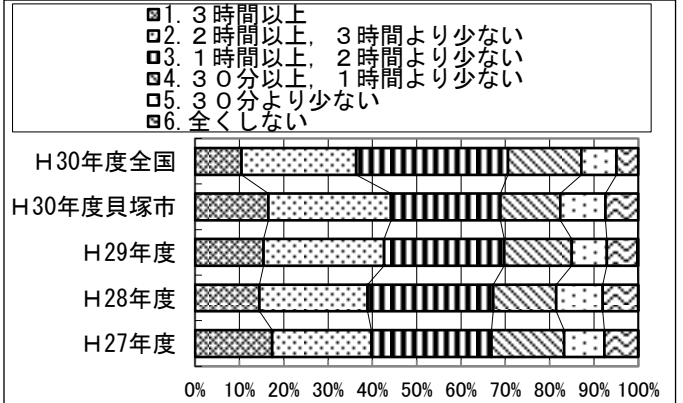
特に小学校では、全ての教科で「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より13~15%程度高くなっており、中学校でも数学A・Bにおいて、7~9%程度高くなっていることから、自分の中にある知識や考えを、アウトプット(理解し、整理し直しながら、相手に伝える)することが学力に大きく影響を及ぼすことが読み取れます。

2-(1) 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日），1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）

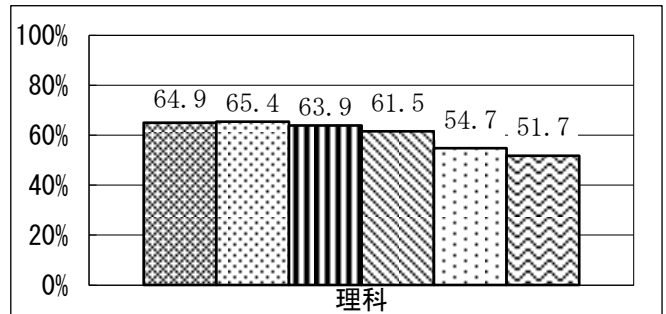
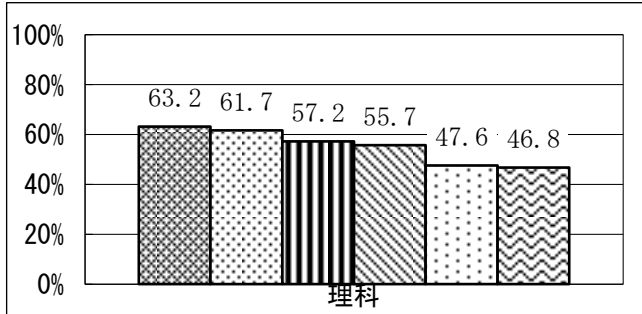
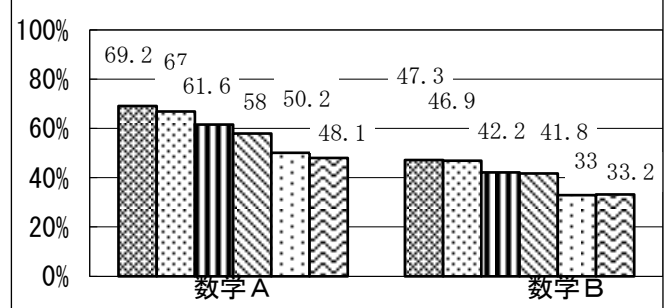
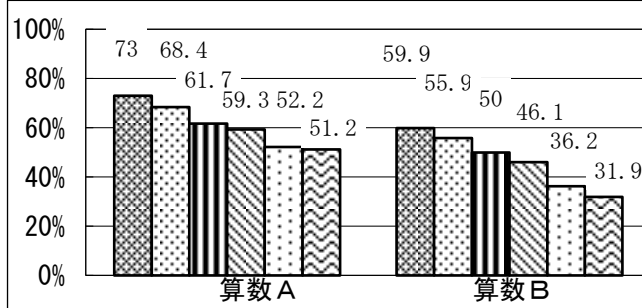
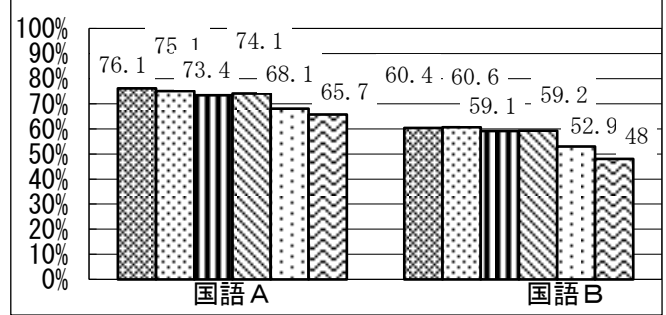
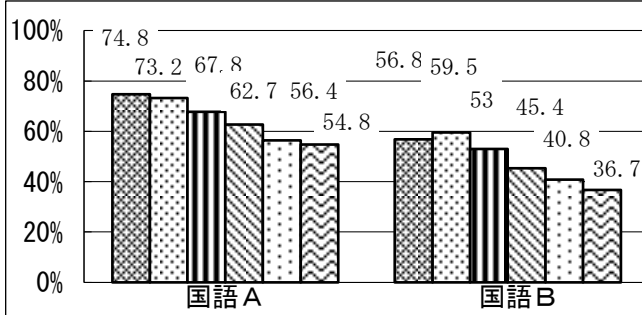
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



2-(1)の質問項目のグラフは、「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日），1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

全国比でみると、「3時間以上」や「2時間以上3時間未満」と回答した児童・生徒の割合は、全国より上回っています。しかし、一方で、「全くしない」や「30分未満」と回答した児童・生徒の割合は、全国より上回っており、二極化していることがわかります。

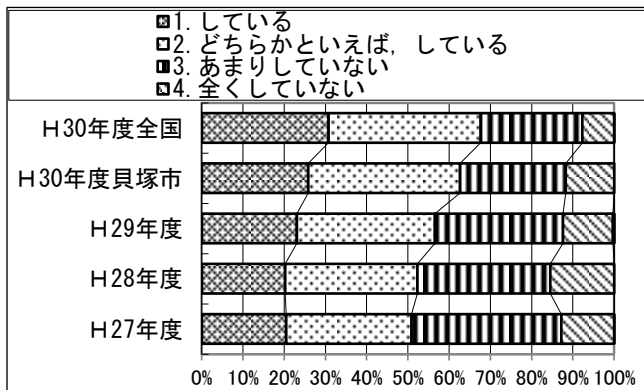
また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校ともに、全ての教科で差が大きく、非常に強い相関関係があることがわかります。

特に小学校では、全ての教科で「3時間以上」と回答した児童の平均正答率が「全くしない」と回答した児童の平均正答率より20%程度高くなっており、中学校でも、10～21%程度高くなっています。

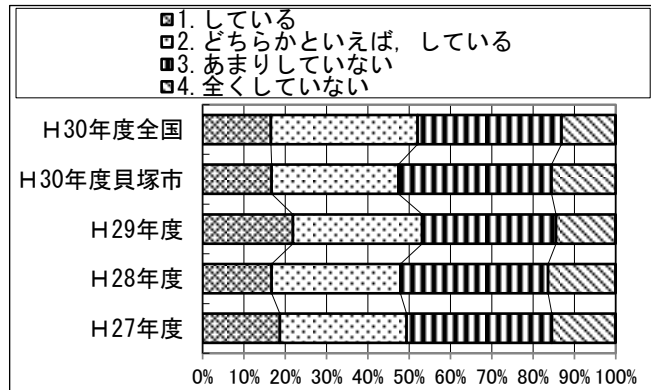
他にも、平日の1日当たりの読書についての質問項目では、「読書は全くしない・10分未満」が全国に比べて小中学校ともに、約14%上回っています。このことから、学習や読書を習慣づけられるような取組みを行っていきたいと考えています。

2- (2) 家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか

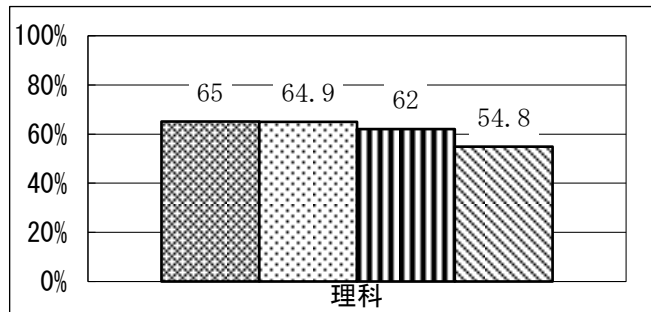
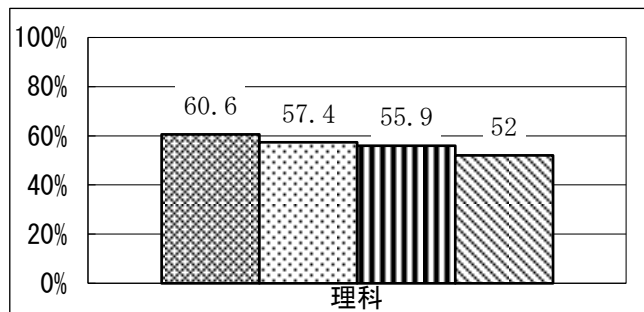
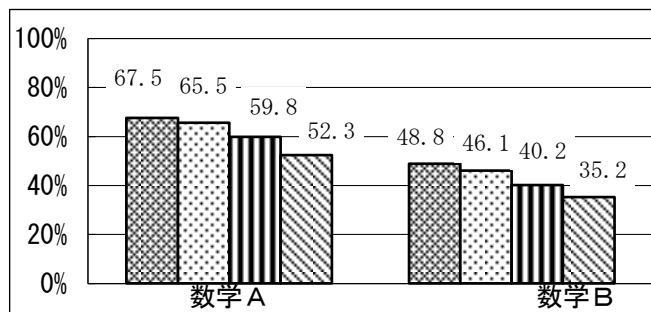
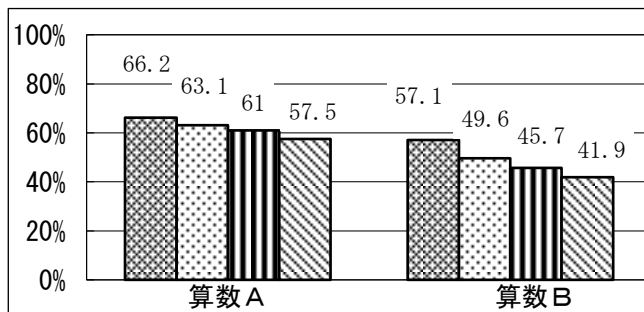
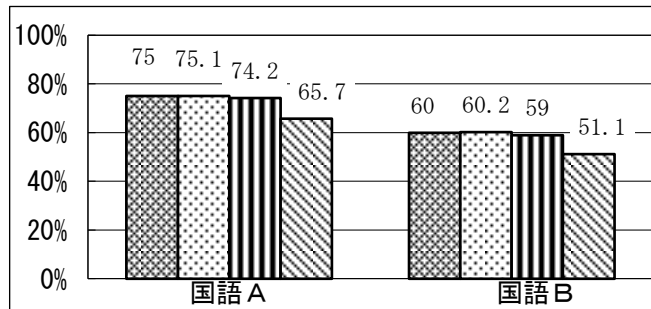
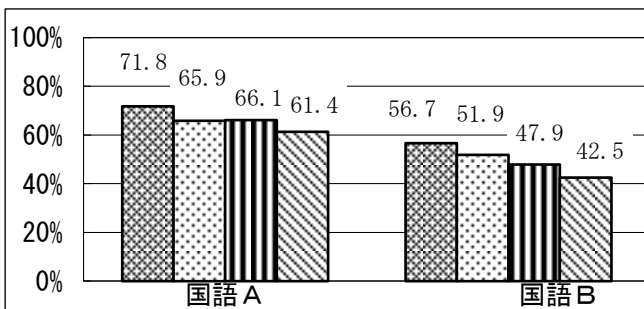
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



2- (2) の質問項目のグラフは、「家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

全国比でみると、小中学校ともに下回っていますが、小学校においては、年々肯定的回答が増加傾向にあります。

また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校ともに、全ての教科で差が大きく、非常に強い相関関係があることがわかります。

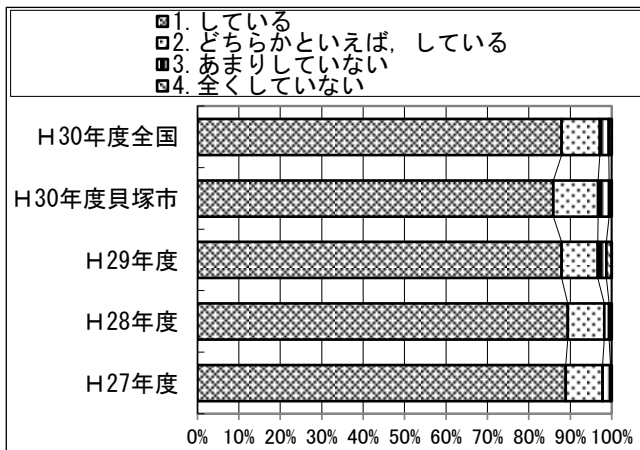
特に小学校では、全ての教科で「3時間以上」と回答した児童の平均正答率が「全くしない」と回答した児童の平均正答率より20%程度高くなっており、中学校でも、10~21%程度高くなっています。

知識・技能を身につけるだけでなく、それらを実生活に活かしたり、自在に活用して様々な問題解決につなげたりする力は、受け身の学び方では育ちません。与えられた課題をこなす学習から、自分で目標を設定し、それに向けて取り組む学習へと進んでいけるよう、計画的に学習する習慣を身につけさせたいものです。

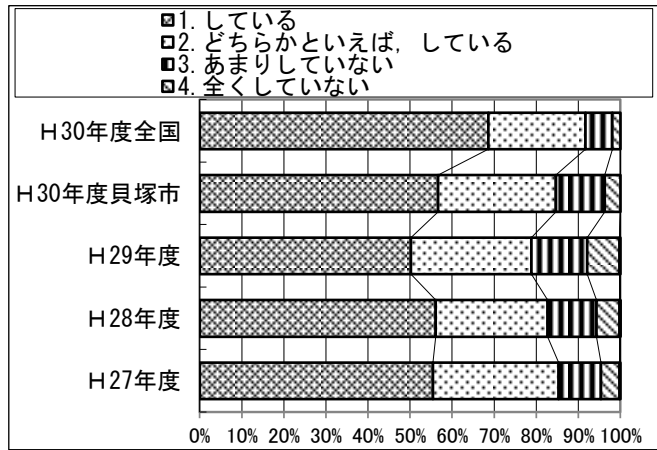
学校でも、具体的な家庭学習の内容や方法について、児童・生徒に示しながら、学習習慣を意識づけしていきたいと思います。また、ご家庭でも子どもたちの学習の様子を見ていただき、お声かけをお願いいたします。

2-(3) 家で、学校の宿題をしていますか

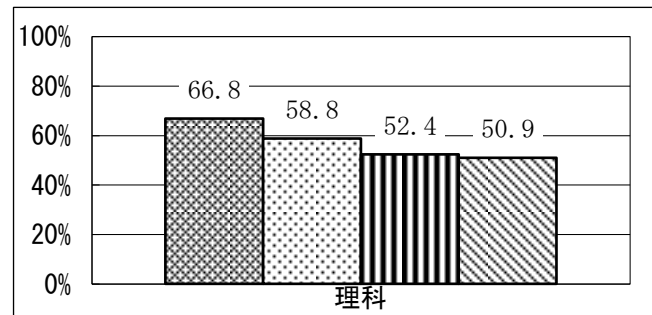
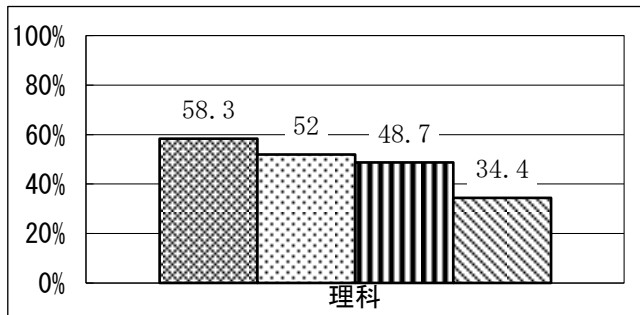
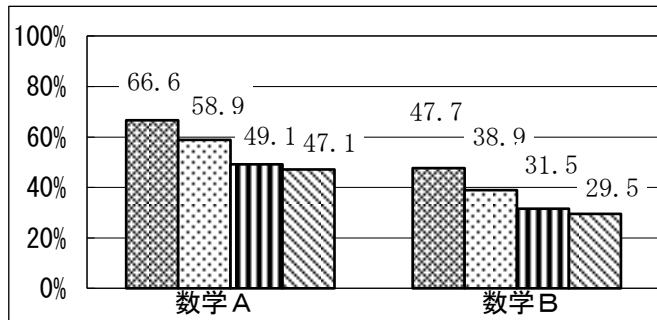
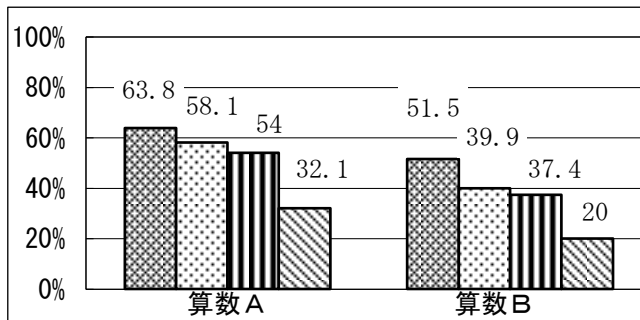
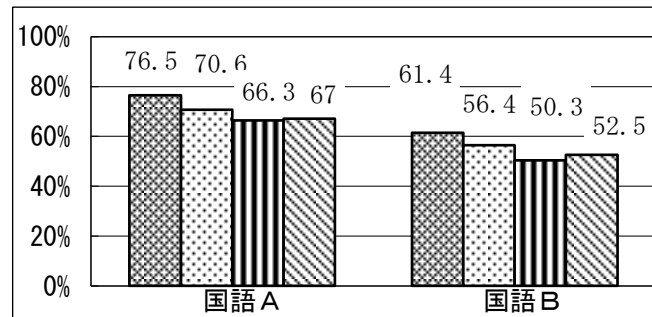
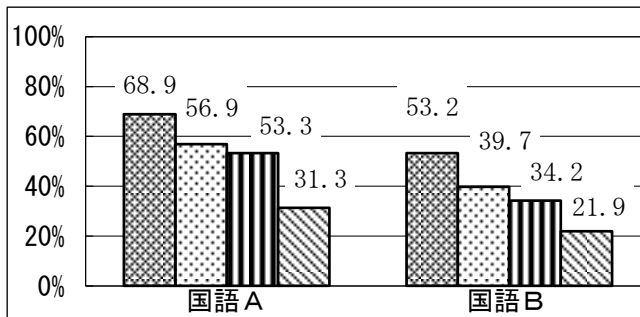
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



2-(3)の質問項目のグラフは、「家で、学校の宿題をしていますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

全国比でみると、小学校は約97%と、ほぼ全国と同様の結果になっており、中学校においては、7ポイント下回っています。

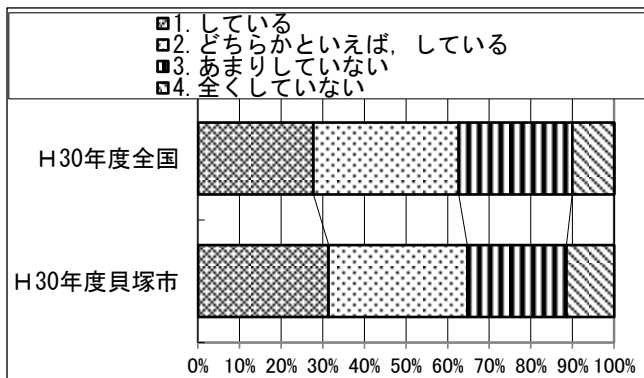
また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校ともに、全ての教科で差が大きく、非常に強い相関関係があることがわかります。

その傾向は特に小学校で強く表れており、国語と算数では、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より約31~38%程度高くなっています。また理科に関しても、約29%高くなっています。中学校でも、特に数学や理科において、約16~20%程度高くなっています。

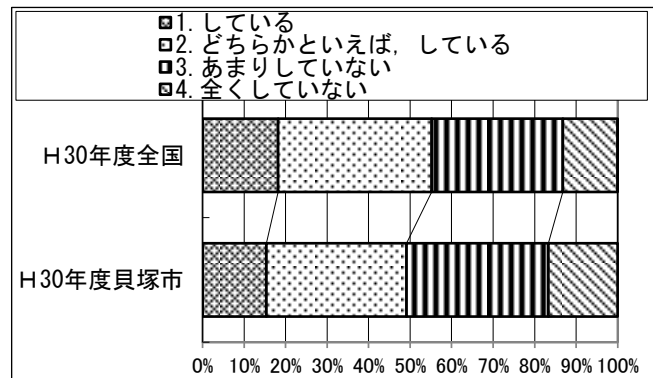
やはり、毎日継続して課題に取り組み、学習習慣が定着している子どもほど、学力も身につけているということがうかがえます。

2-(4) 家で、学校の授業の予習・復習をしていますか

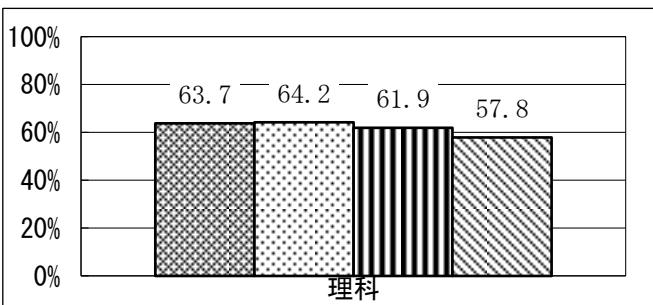
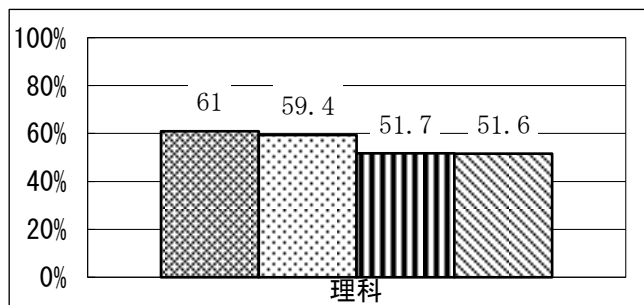
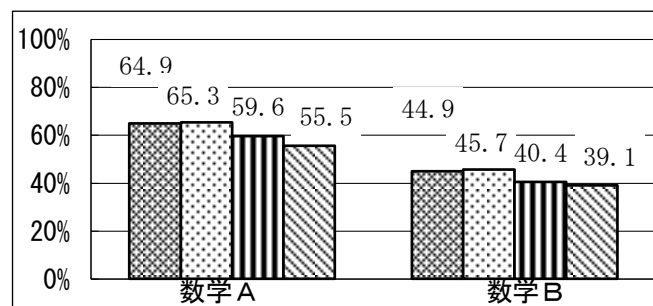
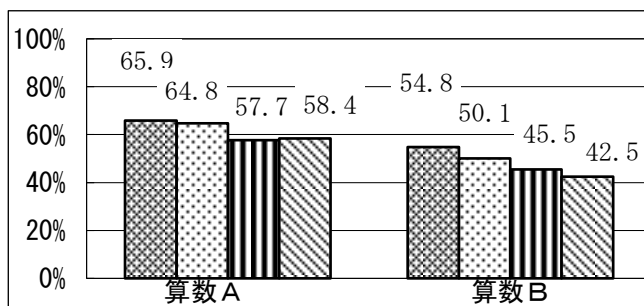
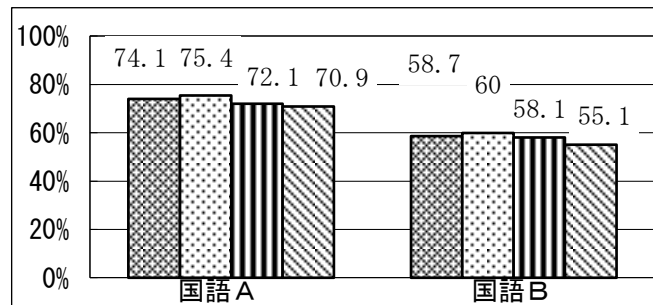
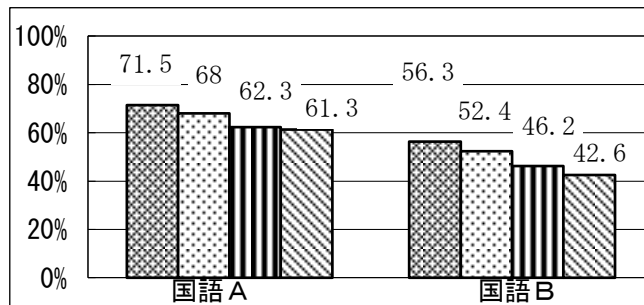
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



2-(4)の質問項目のグラフは、「家で、授業の予習・復習をしていますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を比較したものです。

全国比でみると、小学校は全国より2ポイントほど上回り、中学校においては、6ポイント下回っています。

また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校ともに、全ての教科で差が大きく、強い相関関係があることがわかります。

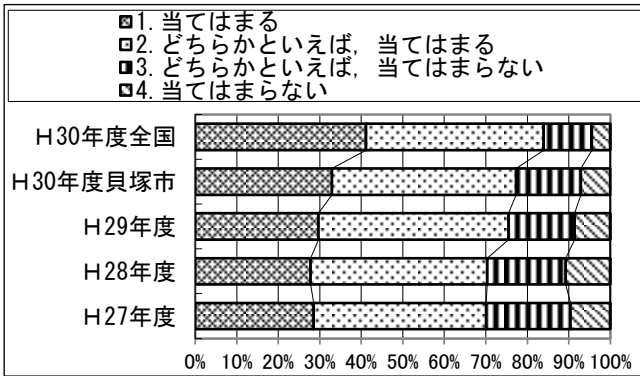
特に小学校では、国語A・Bと算数Bでは、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より約10～14%程度高くなっています。中学校でも、特に数学において、約9%程度高くなっています。

中学校では、以前より、小学校でも近年、「自主学習ノート」といわれるノートを実践しています。これは、与えられた宿題ではなく、自主的に予習・復習ひいては、調べ学習等、子どもたちの主体的な学習ができるような取組みになっているものです。

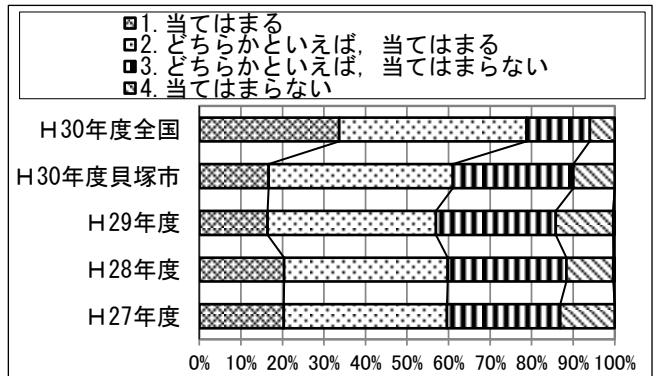
今回の結果より、今後は、さらなる学習習慣の定着と、より効果的な実践の共有に向けて、取り組んでいきたいと考えています。

3- (1) 自分には、よいところがあると思いますか

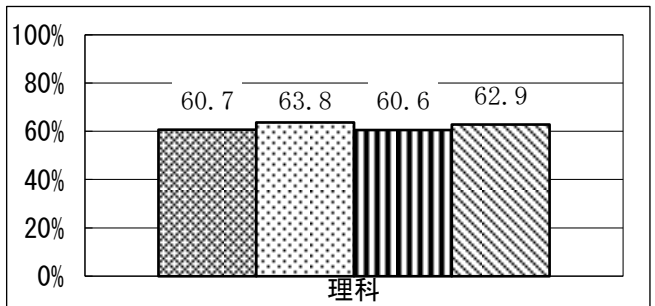
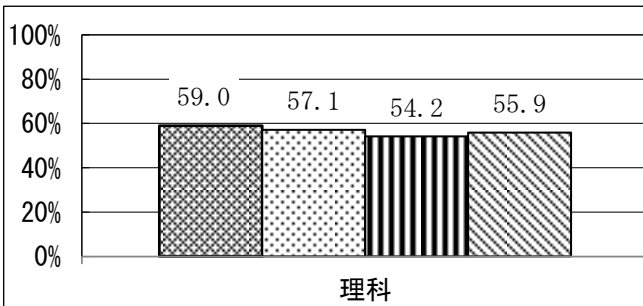
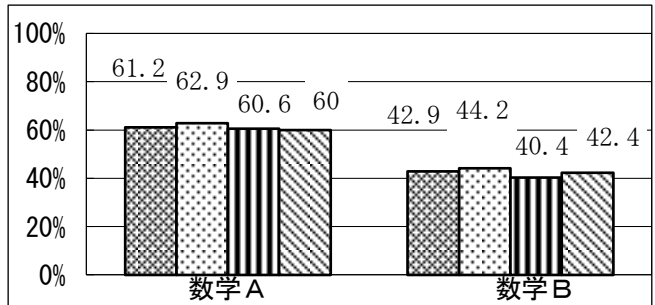
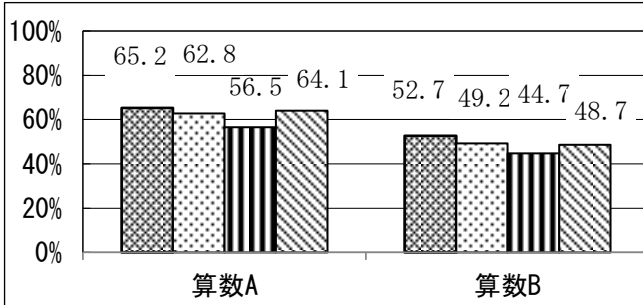
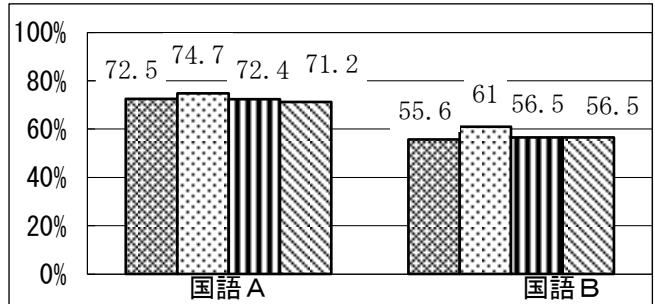
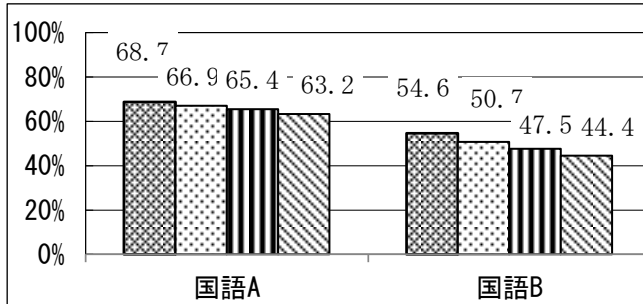
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



3- (1)の質問項目のグラフは、「自分には、よいところがあると思いますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

全国比でみると、小学校は全国より約7ポイント下回り、中学校においては、約18ポイント下回っています。一方で、貝塚市の経年比でみると、肯定的回答は年々増加の傾向にあり、子どもたちへ自信をつけるために行っている様々な取組が結果につながっていることがわかります。

また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童の平均正答率を比較したグラフからは、小学校で、全ての教科で差があり、相関関係があることがわかります。

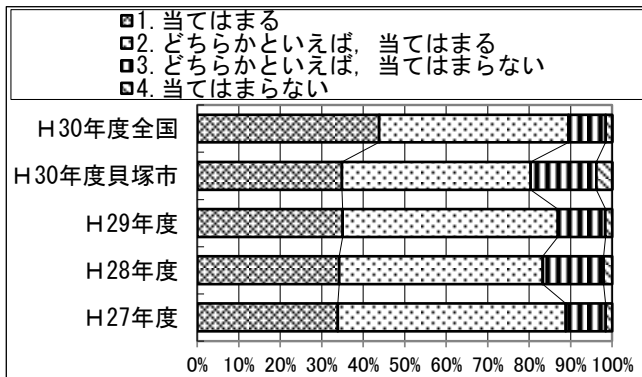
特に、国語Bでは、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より約10%程度高くなっています。また、全国的にみても、「自分には、よいところがあると思う」と回答している児童生徒のほうが、教科の平均正答率が高い傾向が見られます。

このことから、学校では、子ども同士を互いに協力させて取り組ませたり、子どもが活躍できる場を設定したりすることで、他者と関わり、他人の役に立った、他人に喜んでもらったなどの体験を増やす取組を今後も続けていきます。

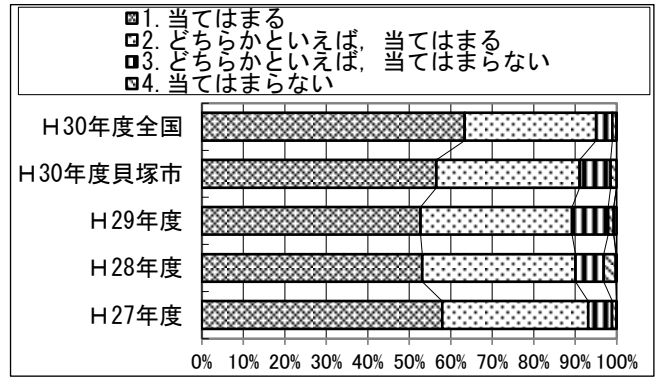
また、自己有用感(自分がどれだけ大切な存在であるかということをも自分自身で認識すること)を育むために、ご家庭や地域でも子どもの話をしっかり耳を傾け、言葉やスキンシップで愛情を示すことや、褒める・励ます・認める声かけを行っていただきたいと思います。

3- (2) 学校のきまり (規則) を守っていますか

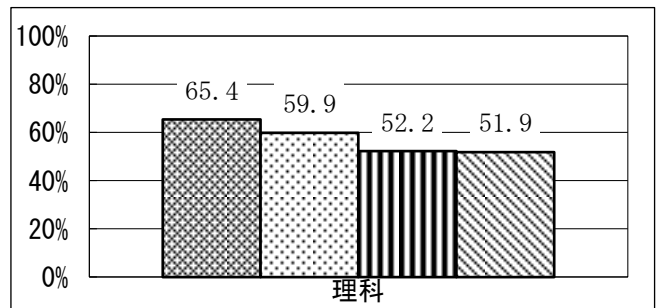
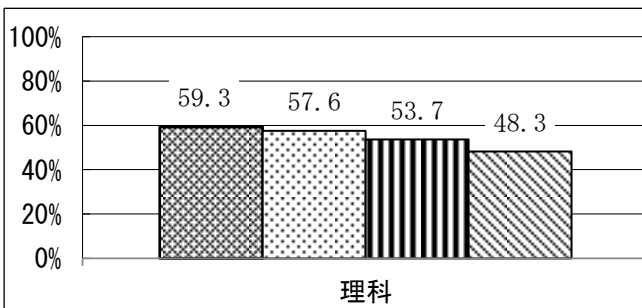
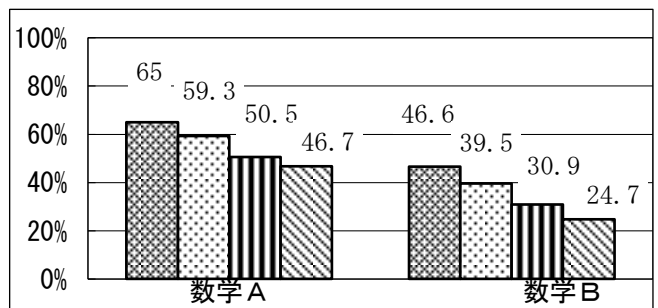
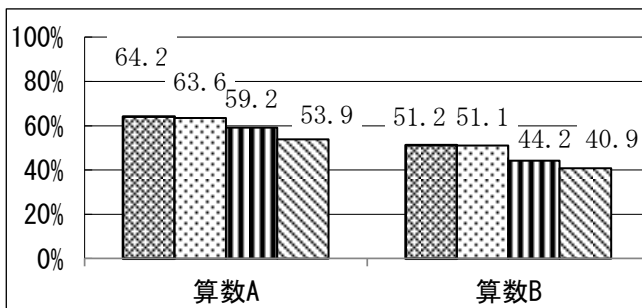
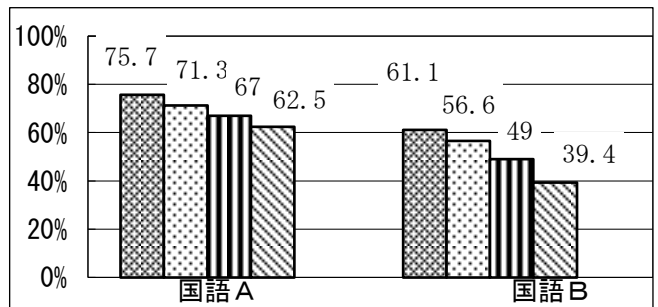
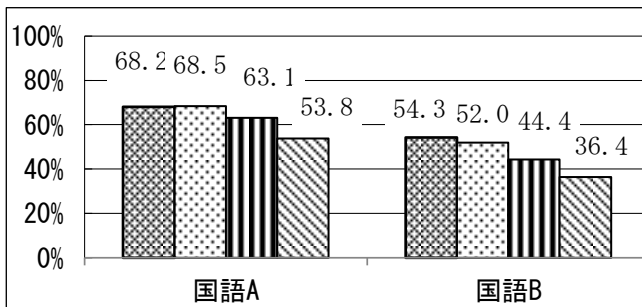
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



3- (2) の質問項目のグラフは、「学校のきまり (規則) を守っていますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。小学校では、80%、中学校では、90%以上の児童・生徒が肯定的回答をしています。

また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校で、全ての教科で差があり、強い相関関係があることがわかります。

特に、小学校の国語では、A・Bともに「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より約14~18%高くなっています。算数Bでも同様に約10%高くなっています。

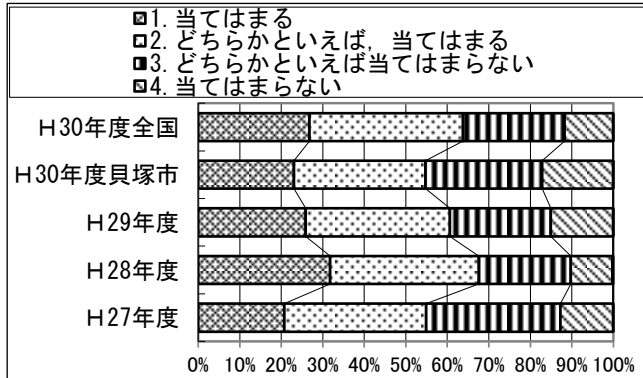
また、中学校では、国語Bと数学Bにおいて約22%、その他においても約13~18%高くなっています。

きまりを守ろうとする「規範意識」は、授業規律につながります。「静かに授業を受けよう。」「集中して先生の話の話を聞こう。」という気持ちが学級全体にあれば、先生の話がよくわかり、集中して考えることができるようになります。

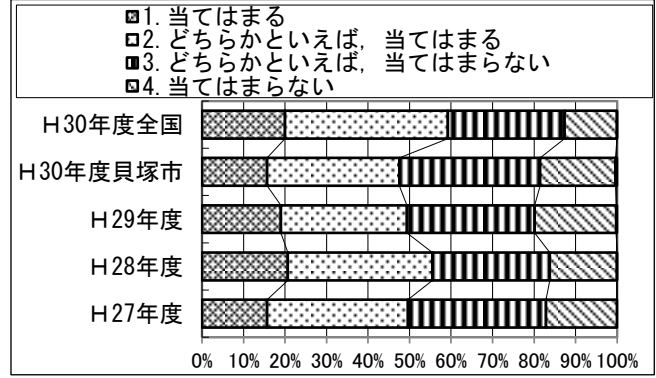
さらに、学力と生活は車の両輪のようなものであると言えます。家庭生活や学校生活が安定し、事の善悪や価値がしっかり示された環境で、学ぶ楽しさや喜びを感じることができる授業づくりをすすめることが、規範意識の向上につながると考えられます。

3- (3) 地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか

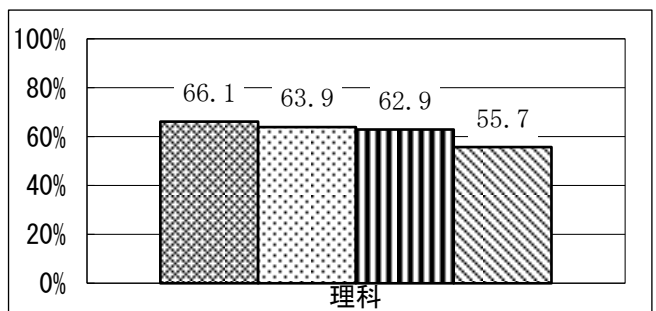
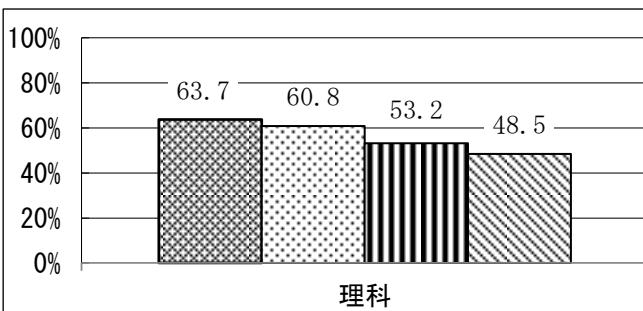
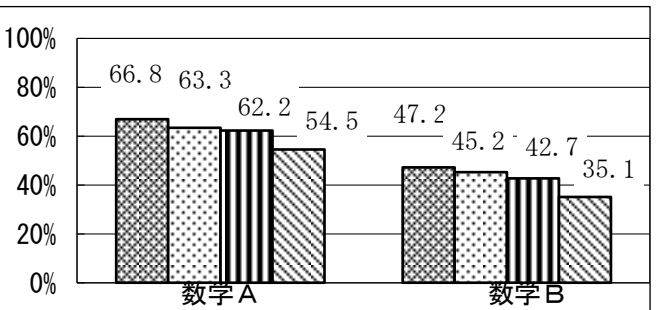
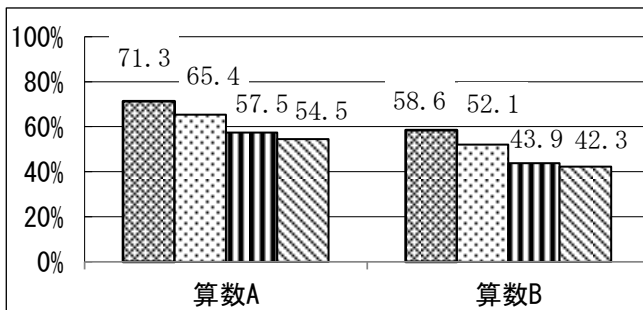
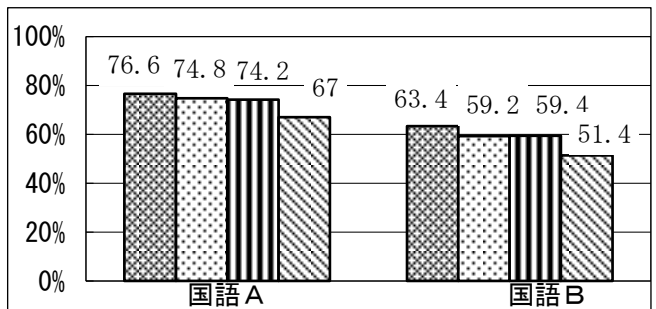
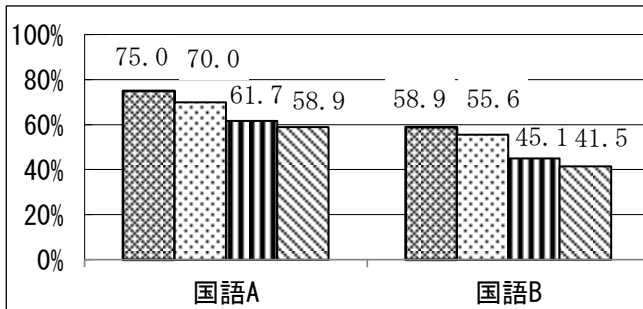
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



3- (3)の質問項目のグラフは、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。全国比で見ると、小学校は、約9ポイント、中学校では、約12ポイント下回っています。また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校で、全ての教科で差があり、相関関係があることがわかります。

特に、小学校の全ての教科で、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より約15～17%高くなっています。

また、中学校でも同様に、全ての教科において約10%～約12%高くなっています。

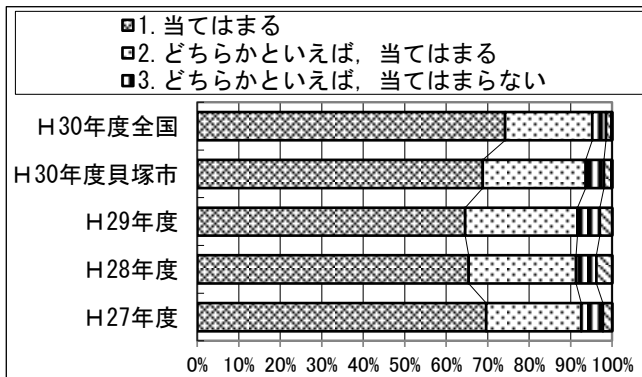
別の質問項目「テレビのニュース番組やインターネットのニュースを見ますか(携帯電話やスマートフォンを使ってインターネットのニュースを見る場合も含む)」では、小中学校ともに80%以上の児童生徒が肯定的な回答をしています。一方、別の質問項目「新聞を読んでいますか。」の問いでは、「ほとんど、または、全く読まない」と回答した児童・生徒は、小学校では約71%、中学校では、約77%にもなっています。

携帯電話やスマートフォンの普及により、新聞ではなく、ネットニュースから情報を得ているという子どもたちが多くみられることがわかります。地域や社会に関心をもち、新聞やニュースなどの情報を得ることが、子どもたちの学力・学習状況により影響を与えている結果が出ていますが、資料や内容を読み取る力をつけるには、「新聞を読む」ことが有効であると考えられます。

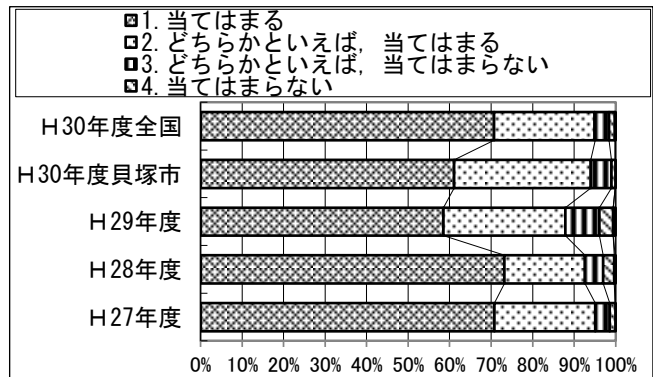
学校では、新聞をはじめとした様々な資料を活用し、それらをじっくり読んで情報を得る活動を、授業の中でも取り入れていきたいと考えています。

3-(4) 人の役に立つ人間になりたいと思いますか

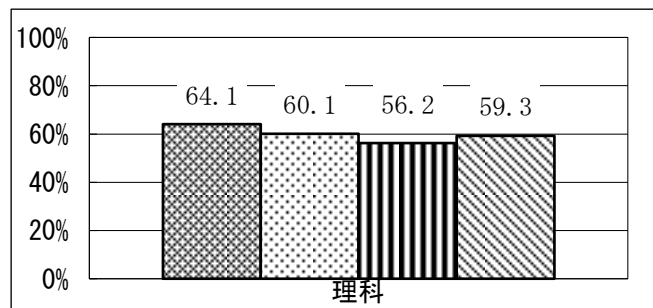
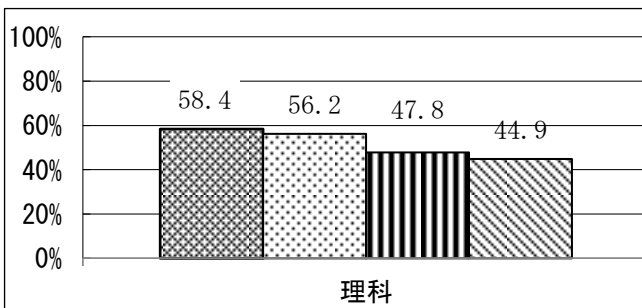
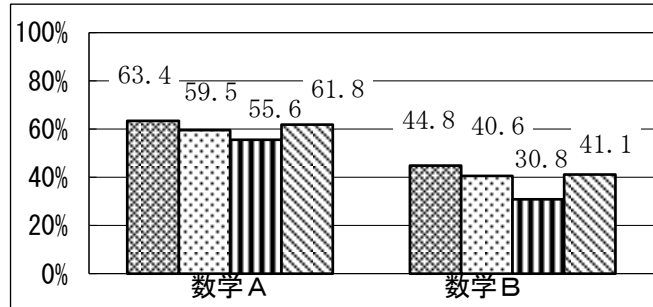
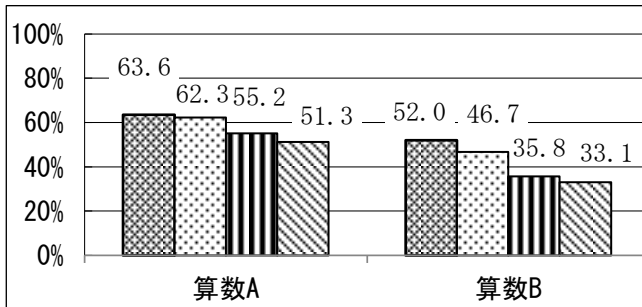
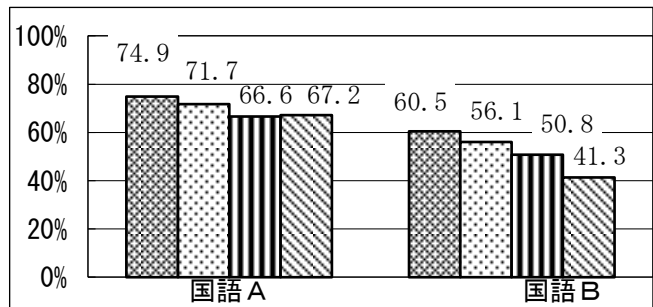
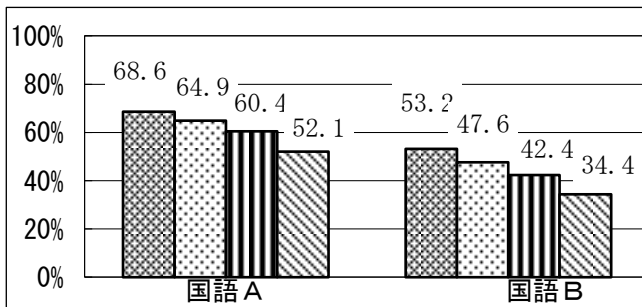
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



3-(4)の質問項目のグラフは、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。小中学校ともに、90%以上の児童・生徒が肯定的な回答をしています。

また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童の平均正答率を比較したグラフからは、小中学校で、全ての教科で差があり、相関関係があることがわかります。

特に、小学校の全ての教科で、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童の平均正答率より約12~19%高くなっています。また、中学校では、特に国語A・Bにおいて約8~19%高くなっています。

「人の役に立つ人間になりたい」という気持ちは、「自己有用感」をもつことにつながります。この「自己有用感」は、人の役に立ち、相手から認められること、人との関わりの中で育まれるものです。自分に自信を高め、よりよい人間関係をめざし他者から期待されることを喜びとする子どもたちを育成するために、「誰かの役に立ちたい！感謝されるって気持ちいい！頑張る姿を見てもらいたい！」と思える場の設定を行っていきます。また、授業の中でも、達成感や成就感を味わわせることができるよう、意見を価値付けたり、自身の学びを振り返せたりしながら、子どもたちの「自己有用感」を高めていく取組みを続けていきたいと思っています。

IV 今後に向けて

全国学力・学習状況調査は、今、学校で行われている学習状況を見直すための1つのツールです。

子どもたちにつけたい力をつけることができているのか、それをこの調査で検証します。

今回の分析結果を、学校・家庭・教育委員会で共有するとともに、学校は、子どもたちが学ぶ本質的な意義を問い直し「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の視点からの授業づくりに向けて取り組んで参ります。

- 一人ひとりの子どもたちの学習状況を把握し、きめ細かな指導を行うことで、子どもたちが安心して、わかる授業を進めます。
- 子どもたちの学校での様子や取組みを積極的に情報発信していきます。
- 家庭学習の仕方や効果的な方法について提案し、子どもたちが計画的に学べる仕組みと学習習慣の確立を図っています。
- 家庭・地域と連携した取組を工夫していきます。
- 「自己有用感」を高める取組を続けていきます。

今回、児童生徒質問紙より、特に学力と高い関係にある項目についてピックアップしました。これは、子どもたちの生活を見取るために重要なデータとなっています。

この全国学力・学習状況調査の結果から、改善しなければならない生活習慣、学校の指導方法が見えてきます。

また、ご家庭でのご協力の結果、良い習慣につながっていたり、学校の取組みの成果が表れたりしている項目も見られます。

子どもたちの意識を正しく把握し、子どもたちに「10年後、20年後を見据えた学力」をつけていくことが学校の果たすべき役割です。

また、ご家庭では、子どもの様子に関心を持ち、学習面はもちろんのこと、日頃の生活や体験活動にも配慮をしながら、子どもとよく話をする働きかけが大切だと言われています。

この調査結果は学力の一端ではありますが、今回は、その概要についてお知らせいたしました。これらの課題を共有して、学校と家庭で協力し子供たちを伸ばしていきたいと考えます。

「子どもたちが学ぶ楽しさや喜びに気づき、生涯にわたって意欲をもち学び続ける力」先の見通しにくい、変化の激しい社会を生き抜いていくために、そんな力を身につけさせたいと考えています。

そのためには、学校と家庭とが協力し合うことが大切です。

今後とも、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。